

高槻市

梶原寺跡

主要地方道西京高槻線B P 道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年9月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

梶原寺跡

主要地方道西京高槻線B P 道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

高槻市の東部に位置する梶原地区は、古代山陽道の大原駅家があったと推定される場所の一つで、淀川を介した水運などと共に交通の要衝として繁栄していました。中世においては当時の幹線道路であった西国街道が通り、現代においても、名神高速道路を始めＪＲ京都線・阪急電鉄京都線・ＪＲ東海道新幹線・国道171号など主要交通網が集中する交通の要所になっています。

今回の調査地である梶原寺跡は、出土瓦から7世紀後半の創建と目され、市内最古の寺院とされます。

梶原寺は『正倉院文書』にその名が認められ、天平勝寶八年（756）十一月、摂津国の役所を通じ、東大寺に使用する瓦六千枚の製作を依頼されています。同じ時期、興福寺に三万枚、四天王寺にも一万四千枚依頼されており、これら大量の瓦は、東大寺の大仏殿を囲む回廊に葺くためのものと解釈されています。ちょうどこの時期、孝謙天皇が、亡くなった聖武上皇の一周忌の法要までに、東大寺の回廊を完成させるよう命じています。これらの史料から、奈良時代の梶原寺の賑やかさが伝わってくるではありませんか。

今回の調査では、寺院に関わる直接的な成果はありませんでしたが、これまで知られていなかった平安時代後期の井戸、縄文時代の土器や石器の出土を見ることができました。また、土石流によって流されたであろう梶原寺関連の遺物等を知ることができたことも、貴重な調査成果と言えるでしょう。本書が梶原寺跡を考究する上での一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するに当たり、大阪府茨木土木事務所、大阪府教育庁、高槻市教育委員会、地元自治会を始めとした関係者の皆様に、ご指導ご鞭撻を賜りましたこと、衷心より感謝申し上げます。

今後とも、埋蔵文化財について、また当センターの事業について、多くの方々のご理解ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成29年9月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 田 邊 征 夫

例 言

1. 本書は、大阪府高槻市梶原1丁目に所在する梶原寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、主要地方道西京高槻線B P道路改良事業に伴い、大阪府茨木土木事務所より委託を受け、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 調査及び整理に関する受託名称・調査名・受託期間・体制は、以下の通りである。

【調査】

受託名称：「主要地方道西京高槻線B P道路改良事業に伴う梶原寺跡埋蔵文化財調査業務委託」

調査名：梶原寺跡16-1

受託期間：平成28年12月9日から平成29年3月17日

体制：事務局次長：江浦 洋、調整課長：岡本茂史

調査課長補佐：三好孝一、副主査：鹿野 塁

【整理】

受託名称：「主要地方道西京高槻線B P道路改良事業に伴う梶原寺跡埋蔵文化財調査遺物整理業務委託」

受託期間：平成29年5月1日から平成29年9月29日

体制：事務局次長：江浦 洋、調整課長：岡本茂史

調査課長補佐：三好孝一、副主査：鹿野 塁

4. 現地調査の写真撮影は調査担当者が、遺物写真撮影は調査課写真室が、木製品の樹種同定は、調査課専門員山口誠治が行った。
5. 発掘調査及び整理作業の過程で、以下の方々並びに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
岡本敏行（大阪府教育庁）、高橋公一・内田真雄・早川圭（高槻市教育委員会）、大阪府茨木土木事務所
6. 本書の編集・執筆は、非常勤職員の協力の下、鹿野が行った。
7. 本書に関わる写真・実測図などの記録類・出土遺物は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図及び断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。図中の標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値であり、T.P.+は省略した。
2. 座標値は世界測地系（測地成果2000）による平面直角座標系第VI系に基づき表示し、単位はすべてメートルであり、記号のmは省略した。
3. 全体図及び遺構実測図の方位は、いずれも国土座標軸第VI系の座標北を示す。
4. 現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6. 遺構番号は、調査区に関係なく1から順に付した。遺構番号—遺構名として表現した。
(例:「1溝」・「2ピット」)
7. 遺構図における断面位置は、図面上に「—●」によって示した。
8. 遺物実測図の縮尺は、4分の1を基本とするが、金属器などで小型のものは2分の1で掲載するなど、遺物の大きさに即した縮尺としたため、一部はこの限りではない。各図面にはスケールを付しているの参照されたい。また、写真図版の遺物はスケールを統一していない。
9. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りで表現し、瓦器は断面を網フセ、瓦は断面を斜線で表現した。それ以外の土器は断面白抜きである。
10. 掲載遺物は通し番号を付し、本文・挿図・写真図版・表共に一致する。掲載遺物番号は1～50。
11. 本書を作成するに当たり、古墳時代の土師器は辻美紀1999、須恵器は田辺昭三1981、古代の土器は古代の土器研究会編1992・1993・1994、中世の土器は中世土器研究会編1998に拠った。
12. 参考文献は巻末（32頁）にまとめた。

目 次

序	文
例	言
凡	例
目	次

第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 梶原寺に関する知見及び既往の発掘調査	4
第3章 調査の方法	8
第1節 現地調査	8
第2節 整理作業	10
第4章 調査成果	11
第1節 1区	11
第2節 2区	14
第3節 3区	16
第4節 4区	17
第5節 5区	20
第5章 総括	29

写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

図1	調査地位置	1	図15	4区 南壁断面	18
図2	周辺遺跡分布	2	図16	4区 第2・3面 平面	19
図3	既往調査及び今次調査位置	5	図17	4区 5・6溝 断面	20
図4	地区割り	8	図18	4区 出土遺物	20
図5	地区割りと調査区配置	9	図19	5区 南壁断面	21
図6	1区 南壁断面	11	図20	5区 第1・3面 平面	23
図7	1区 平面	12	図21	5区 2井戸 平・断面	24
図8	1区 出土遺物(1)	13	図22	5区 4土坑 断面	24
図9	1区 出土遺物(2)	14	図23	5区 第4面 平面	24
図10	2区 南壁断面	14	図24	5区 2井戸 出土遺物	25
図11	2区 平面	15	図25	折敷の復元	26
図12	2区 出土遺物	15	図26	5区 包含層 出土遺物	26
図13	3区 西壁断面	16	図27	各調査区断面柱状図	30
図14	3区 平面	17	図28	既往調査と土石流	31

表 目 次

表1	梶原寺跡調査一覧(1)	6	表3	掲載遺物一覧(1)	27
表2	梶原寺跡調査一覧(2)	7	表4	掲載遺物一覧(2)	28

写 真 目 次

写真1	現地調査及び整理作業風景	10
-----	--------------	----

写 真 図 版 目 次

扉	3.5区 南壁断面(北西から)
1.1・2区 調査前状況(東から)	4.5区 第1面 全景(西から)
2.4・5区 調査前状況(西から)	5.5区 第3面 全景(西から)
写真図版1	6.5区 第4面 全景(西から)
1.1区 南壁断面(北東から)	7.5区 第3面 4土坑断面(北から)
2.1区 全景(東から)	8.5区 南壁断面 縄文土器出土状況(北から)
3.2区 南壁断面(北西から)	写真図版3
4.3区 西壁断面(東から)	1.5区 第1面 2井戸 断ち割り状況(南から)
5.4区 南壁断面(北西から)	2.5区 第1面 2井戸
6.4区 第2面 全景(西から)	掘方内土師器皿出土状況(南東から)
7.4区 第3面 全景(西から)	写真図版4 5区 2井戸 出土遺物
8.4区 第3面 6溝断面(西から)	写真図版5 1区 出土遺物
写真図版2	写真図版6 2・4・5区 出土遺物
1.5区 南壁断面(北東から)	
2.5区 南壁断面(北西から)	

第1章 調査の経緯と経過

当調査は、主要地方道西京高槻線B P道路改良事業に伴うものである。調査地は高槻市梶原1丁目地内にある(図1)。調査地周辺は、J R京都線によって南北に住区が分断され、また、西国街道(主要地方道西京高槻線)沿いを中心に集落地等が形成されている。現在、東西方向の広域的な車の移動は西国街道が担っているが、幅員6 m未満の区間が続き、交通事故も度々発生していることから、国道171号への連絡路や西国街道のバイパス機能の確保が課題として挙げられていた。また、近年では新名神高速道路事業が行われており、その出入り口となる(仮称)高槻ICの供用に併せ、ICへのアクセス道路が整備されてきている。そのような中で、主要地方道西京高槻線B Pは、現在のJ R京都線の北側に、線路に沿うように東西方向に萩之庄・梶原地区から阪急電鉄上牧駅方面へ東伸する道路として計画されたものである。その道路の路線予定範囲に梶原寺跡の遺跡範囲がかかることから、当該箇所に5箇所の調査区を設定し、1～5区として調査を実施することとなった(図3・5)。

調査面積は、1区:58㎡、2区:16㎡、3区:1㎡、4区:50㎡、5区:90㎡の合計215㎡を測る。調査は、大阪府茨木土木事務所より委託を受け、公益財団法人大阪府文化財センターが大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと実施した。

現地調査は、「主要地方道西京高槻線B P道路改良事業に伴う梶原寺跡埋蔵文化財調査業務委託」として平成28年12月9日に委託契約を結び、平成29年1月5日から同年2月22日まで実施した。調査地は極めて軟弱な地盤であった上に、土中に水分を多く含み、常に排水を伴いながらの調査となった。また、

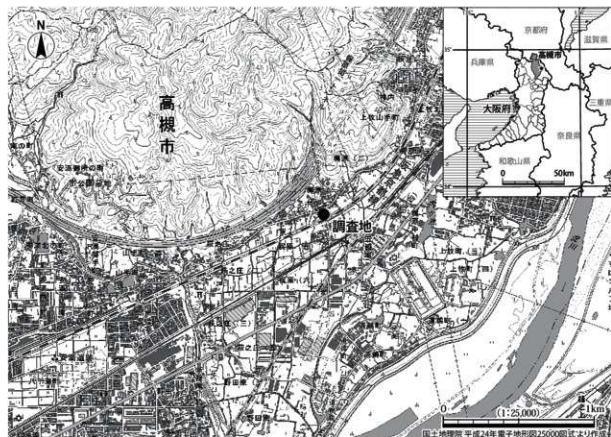


図1 調査地位置

土置き場の確保或使用機械の制限等の理由から、4・5区については二分割し調査を行った。まず、3区から調査を開始し、1区も並行して調査を行った。その後、4区西半を調査し、5区東半、4区東半、5区西半、2区と調査を進めた。以下に、各調査区の調査期間を記す。

1区：平成29年1月12日から1月27日

2区：平成29年2月18日から2月22日

3区：平成29年1月6日から1月27日

4区西半：平成29年1月16日から1月27日

4区東半：平成29年1月31日から2月20日

5区東半：平成29年1月19日から2月9日

5区西半：平成29年2月14日から2月22日

調査では、確認できた遺構および土層断面などについて写真撮影や図面作成などの記録作業を行った。また、調査内容については1月27日に1区・3区・4区西半、2月8日に5区東半、2月20日に2区・4区東半・5区西半、大阪府教育庁文化財保護課の現地立会による確認を受けた(写真1)。

整理作業は、「主要地方道西京高槻線B P道路改良事業に伴う梶原寺跡埋蔵文化財調査遺物整理業務委託」として平成29年4月28日に委託契約を結び、平成29年5月1日から同年6月30日まで実施した。平成29年9月29日、本書の刊行をもって一連の業務は完了した。

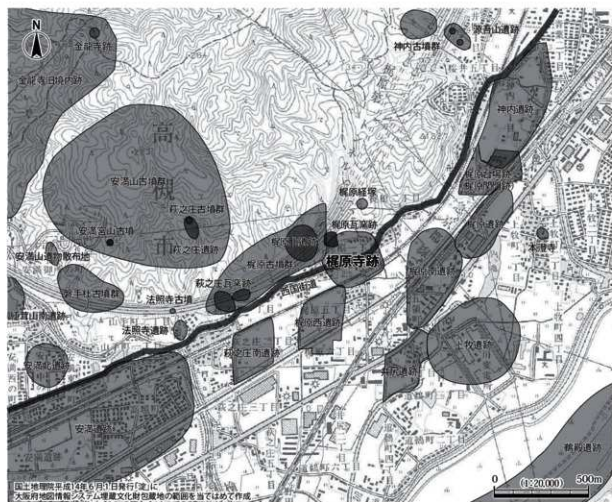


図2 周辺遺跡分布

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

高槻市域は、その地形的特色により、山地・丘陵地・台地・谷底平野・沖積低地(淀川低地)の五つに区分される。市域北部には丹波高地に連なる北摂山地が拡がり、市域南部は大阪平野の北部を形成する淀川低地が拡がる。また、北摂山地と淀川低地とが接する中央部には高槻丘陵と総称される丘陵地が続き、富田台地が南方へ突き出している。市域南部に拡がる低地は、その大部分が標高10m以下の低湿地で、淀川低地北縁の山麓には標高10～20mの小さな扇状地がいくつも並んでいる。このうち最大のもは、芥川左岸に形成された芥川扇状地で、扇頂から扇端まで、半径約2kmを測る。標高8～18mで、その間の平均勾配200分の1。このほか、高槻丘陵や安満山の南麓にも小さな扇状地が見られるが、これらの扇状地は一層傾斜が強い。

今回の調査地である高槻市梶原周辺は、高槻市の東端部に位置し、北を北摂山地、南を淀川に挟まれた、幅1km程の狭隘な淀川低地上に立地している(図2)。古代の山陽道や中世の西国街道、淀川を介した水運など交通の要衝に当たり、現在でも名神高速道路や国道171号、J R京都線、J R東海道新幹線、阪急電鉄京都線が集中する地となっている。

調査地は、安満山南麓の小さな扇状地がいくつも見られる部分に位置している。調査区を設けた場所は扇状地の扇端に相当するものと考えられ、現況では傾斜変換点に当たる。梶原地区では、傾斜変換点に沿うようにJ R京都線が敷設されている。

第2節 歴史的環境

梶原寺跡及びその周辺には、古くは弥生時代から人々の営みがあったことが知られている。南西に接する梶原西遺跡では、弥生時代中期前葉の方形周溝墓が約10基検出されている。東方の梶原南遺跡でも弥生時代中期の土坑や方形周溝墓、後期の竪穴建物や溝が検出されており、いくつかの集落が営まれていたようである。

古墳時代には、前期の前方後円墳とされる萩之庄1号・2号墳が安満山の根根上にあるが、総体としては後期の群集墳が多く、北の山腹域に安満山古墳群・梶原古墳群・萩之庄古墳群・磐手杜古墳群などが形成されている。平野部では、上牧遺跡で中期初頭の竪穴建物、梶原南遺跡で後期の竪穴建物、井尻遺跡で中期の祭祀遺構などが確認されている。

古代には梶原南遺跡で奈良時代の多数の建物群とともに「新屋首乙賣(にいやおびとおとめ)」と記された木簡が発見されている。梶原南遺跡は古代駅家の一つ、大原駅の推定地でもある。

条里型地割は、梶原西遺跡周辺にその痕跡を認めるのみで、井尻遺跡の西端を画する道路に踏襲された土地区画のラインが、その条里型地割に含まれる可能性はあるが、それ以東の遺跡範囲にはその痕跡らしき土地区画は確認できず、条里型地割が施行されなかったと考えられる。

淀川の沿岸には摂関家領桶葉牧、官牧鳥飼牧をはじめとして、牛馬を放牧しておく近都牧があったらしい。周辺には今も「上牧」の他、「三箇牧」「牧野」「牧田」などの地名が残る。応永4年(1397)には「井尻牧」の名も見える。梶原地区には川原牧という小字名も今に残る。淀川流域には摂関家相伝の桶葉牧の他、

藤原氏の牧・荘園が多く、後に13世紀初頭頃、春日若宮に寄進されていくが、今も淀川沿いに春日系統の神社が多いのはその名残であろう。『御堂関白記』には楠葉牧に播磨の馬を放牧した記述があり、11世紀初頭頃までは、まだ耕地開発が進まない、実質的な牧であったと思われる。

南の淀川河川敷は「鶴殿の草原」として昭和20年(1945)まで宮内庁雅楽寮に草を納めていた土地で、その地名は紀貫之の『土佐日記』にも宿泊地として見える。11世紀後半には藤原兼家の子孫が鶴殿・井尻に居住し鶴殿氏と称し、開発を進めたという伝承もある。

第3節 梶原寺に関する知見及び既往の発掘調査

梶原寺が歴史上初めて登場するのは、『正倉院文書』であり、その後もいくつかの史料にその名が散見される。以下にその具体を簡潔に記す。

『正倉院文書』(東京大学史料編纂所『大日本古文書』編年之四 明治36年発行・昭和52年覆刻 所収)

天平勝寶九歳三月十六日 摂津職解 申勘注東大寺瓦事

天平勝寶9年(757)三月十六日の摂津職解として東大寺の瓦の事について調査記録したものが初見である。その前年の天平勝寶8年(756)十一月二日に太政官符として、東大寺に使用する瓦を梶原寺で6,000枚製作するよう依頼を受ける。それがその後どうなったかを造東大寺司からの依頼に応える形で報告している。6,000枚の瓦のうち、見運上したものが5,360枚、遺されたものが640枚ある、との報告をしている。約3カ月の間に6,000枚の瓦を製作し得る瓦窯及び工房があったことが推定できる。

『類聚國史』(新訂増補國史大系『類聚國史』第四 吉川弘文館 昭和56年 所収)

卷第百八十二 佛道部九 寺田地

桓武天皇延暦11年(792)四月丙戌条に、「在摂津国嶋上郡菅原寺野五町。梶原僧寺野六町。尼寺野二町。或寺家自買。或債家所償。並縁法制。還與本主。・・・」とあり、梶原寺に僧寺と尼寺があったことが知られる。

『今昔物語』(『今昔物語集』三 日本古典文學大系24 岩波書店 昭和36年 所収)

卷第十二 書寫ノ山ノ性空聖人語第卅四

「・・・其日晚レテ、摂津ノ国ノ梶原寺ノ僧房ニ宿リシヌ。・・・」とある。圓融院(円融天皇、第64代)が退位後、重く煩うこととなったため、播磨国飾磨郡の書写の山という所にいる性空聖人を呼ぶこととなった。その際、京から判官代孝忠?が、院の召使1人を具して聖人の乗る馬を引かせて、播磨国へ下るシーン(寛和2年(986)九月一日のことか)。京から播磨へ下る途中、梶原寺の僧房で宿泊したその夜、枕元に法花経陀羅尼品の偈の紙片が落ちてきて、云々という説話である。梶原寺に僧房があったことが知られる。

『柴山寺文書』(五條市史編集委員会編『五條市史 史料』 昭和62年 所収)

「後龜山天皇繪旨

摂津国梶原寺、所有御寄附當寺薬師堂也、致知行可被專御祈祷者、天氣如此、悉之以状

元中四年三月廿八日 左中辨(花押)

柴山寺々僧等申

梶原寺の御堂は元中4年(1387)に奈良柴山寺の薬師堂として移されたと伝えられており、創建当時の建物は現存していない。

以上、8世紀中葉、8世紀末、10世紀後葉、14世紀後葉の時期についての梶原寺の記録が遺る。

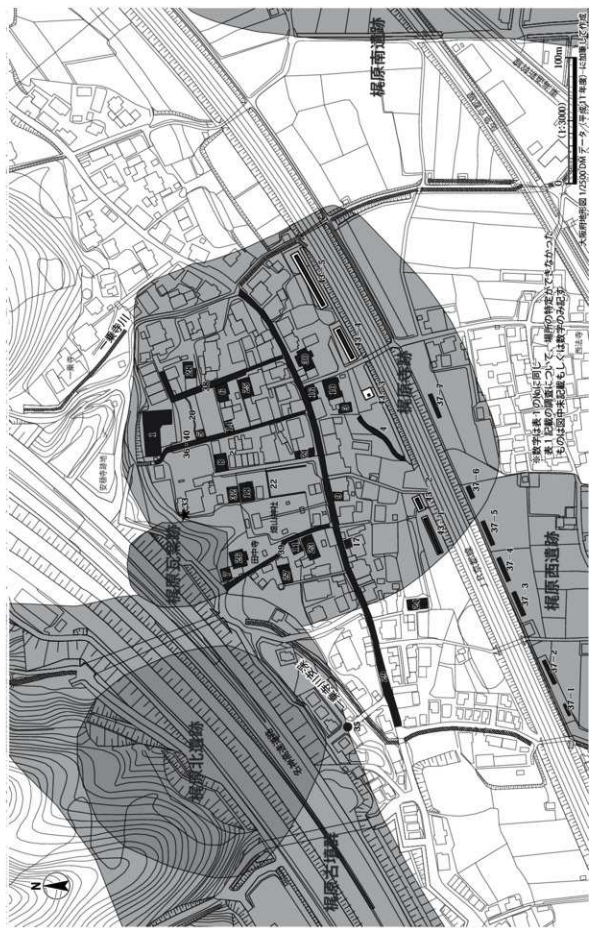


図3 既往調査及び今次調査位置

表1 梶原寺跡調査一覧(1)

No.	地区名	調査期間	面積 (㎡)	場所 (調査当時)	小字名	調査原因	遺構	遺物	備考	掲載文献/発行年月日	
1	—	S52.9 ~11.11	1437	R00R 1 TH 1383	山本 前	私立保育 所建設	奈良時代を中心とする 遺構面と鎌倉時代後半 を中心とする遺構面を 確認 (奈良時代) 掘立柱建物 4棟、柱石9 幸東よりで検出の建 物は、2間×7間以 上の南北に掘立柱建 物で、一辺1m以上の柱 六脚を持つ。僧坊等 の遺構か (鎌倉時代) 礎石建物 1棟、掘立柱建物2棟、 石造扉戸2基、土14 基前	白鳳時代から奈良 時代にかけての多 種の瓦類、土師器、 五重器、瓦器、陶磁 器、門面礎等		昭和51・52年度 高槻市文化財 年報	
2	—	S54.1.26 ~2.26	569	R00R 1 TH 376-1	山本 前	住宅建設	古墳時代前期の遺構面 と中世の遺構面を確 認(古墳時代) 土師器 1棟、ピット、土瓦、高 込み等	(古墳時代) 布直式 併行期の高・狭・高 林等 (中世) 土師器、 瓦、土1基、高込 み等		昭和53・54・55年度 高槻市文 化財年報/S56.12.1	
3	—	S56.11.20 ~11.21	243 (6)	R00R 1 TH 382-2	大門	個人住宅 成築	なし	唐津焼板1点		・船上郡高野池田遺跡発掘調 査報告(高槻市文化財調査機 関XⅡ)/S57.3.31 ・昭和56・57・58年度 高槻市 文化財年報/S00.3.30	
4	—	S61.4.16 ~4.22	160	R00R 1 TH 387 他4基	大門	水路改修	なし	なし		高槻市文化財年報 昭和61・62 年度/H1.4.28	
5	—	S61.8.27 ~8.28	17	R00R 1 TH 372-1	山本 前	水路整備	落込み(中世か)	土師器、瓦、埴輪、木 器		高槻市文化財年報 昭和61・62 年度/H1.4.28	
6	—	S62.3.26	384	R00R 1 TH 371-3	山本 前	個人住宅	なし	なし		高槻市文化財年報 昭和61・62 年度/H1.4.28	
7	—	S62.6.13	104 (8)	R00R 1 TH 378-1・ 378-2	山本 前	社寺建設 (稲葉の 建替入)	なし	須恵器、奈良時代の 瓦丸・平瓦		・船上郡高野池田遺跡発掘調 査報告(高槻市文化財調査機 関XⅡ)/S63.3.31 ・高槻市文化財年報 昭和61・ 62年度/H1.4.28	
8	89-1	H1.5.10	166 (12.5)	R00R 1 TH 1367-1	山本 前	個人住宅	取・落込み	白鳳～奈良時代の 平瓦 12～13世紀頃の土 師器・瓦器、土師器、 瓦、木器		・船上郡高野池田遺跡発掘調 査報告(高槻市文化財調査機 関XⅡ)/H2.3.31 ・高槻市文化財年報 昭和63・ 平成元年度/H3.3.30	
9	89-2	H1.5.30	112 (1)	R00R 1 TH 392-5	大門	個人住宅 建替入	なし	なし		・船上郡高野池田遺跡発掘調 査報告(高槻市文化財調査機 関XⅡ)/H2.3.31 ・高槻市文化財年報 平成2年 度/H3.3.30	
10	—	H2.5.1 ~5.2	443	R00R 1 TH 382-1	大門	個人住宅	なし	なし		調査坑東平は地 山崩まで埋没 当該地は埋没が おけると想定され る	・船上郡高野池田遺跡発掘調 査報告(高槻市文化財調査機 関XⅡ)/H3.3.30 ・高槻市文化財年報 平成2年 度/H4.3.31
11	—	H3.4.22 ~5.2	37	R00R 1 TH 255	奥谷	個人住宅	なし	なし		高槻市文化財年報 平成3年度/ H4.3.31	
12	—	H4.7.3	439	R00R 1 TH 327-1	個人住宅 増築	焼土坑	不明	不明		高槻市文化財年報 平成4年度/ H6.3.31	
13	—	H5.8.23 ~8.31	7	R00R 1 TH 327-1	個人住宅	水路改修	なし	なし		高槻市文化財年報 平成5年度/ H7.2.28	
14	—	H6.1.10	147	R00R 1 TH 371-2	山本 前	個人住宅	奈良時代の瓦器	不明		高槻市文化財年報 平成5年度/ H7.2.28	
15	—	H6.2.21 ~4.27	179	R00R 1・5 TH地内	個人住宅	水路改修	不明	土器、瓦		高槻市文化財年報 平成5年度/ H7.2.28	
16	—	H6.3.9	171	R00R 1 TH 381-1	大門	個人住宅	なし	なし		高槻市文化財年報 平成5年度/ H7.2.28	
17	—	H7.8.29 ~8.31	16 (4)	R00R 1 TH 287	大門	個人住宅	なし	なし		・船上郡藤原20(高槻市文化財 調査報告XⅡ)/H8.3.29 ・高槻市文化財年報 平成7年 度/H9.2.28	
18	96-1	H8.6.13 ~7.1	893 (50)	R00R 1 TH 1137	山本 前	社務所建設	青色色砂礫層上面:溝 1条(奈良時代に属す か) 黒色土層上面:土坑 1基(古墳前期(布直式 期以前)か)	土師器、瓦		・船上郡藤原21(高槻市文化財 調査報告XⅡ)/H9.3.31 ・高槻市文化財年報 平成8年 度/H10.2.27	
19	—	H8.11.11 ~H9.3.31	216	R00R 1 TH 地内	個人住宅	水道管敷 設	なし	なし		高槻市文化財年報 平成8年度/ H10.2.27	
20	97-A	H10.2.3 ~3.9	70	R00R 1 TH 372-1	山本 前	フェンス	遺構面に達せず、不明	不明		高槻市文化財年報 平成9年度/ H11.1.29	

次に、これまでの梶原寺に関する発掘調査成果について、既往の調査を振り返ってみたい。

昭和52年、私立保育所の建設に伴う発掘調査により、奈良時代に属する2間×7間以上と規模の大きい掘立柱建物が発見され、L字に配置される建物群が見つかった。梶原寺の僧房等ではないかと考えられている。梶原寺跡付近には、東四方院・西四方院・末房などの字名が残っており、僧房の存在が示されていた。平成4～6年、名神高速道路の拡幅工事に伴う発掘調査により、梶原瓦窯と工房跡が発見

表2 梶原寺跡調査一覧(2)

No.	地区名	調査期間	面積(m ²)	場所(調査区画)	小字名	調査区画	遺構	遺物	備考	掲載文献/発行年月日
21	97-B	H10.2.23 ~2.27	316	梶原1丁H 373-1	山本 前	共同住宅	近世・近代の土坑・柱 穴・落ち込み等	近世土師器、近世 瓦、木製品(引子板)	寺院に関わる遺構 はみられない	高槻市文化財年報 平成9年度/ H11.1.29
22	97-C	H10.3.3 ~3.31	1029	梶原1丁H 379	山本 前	フェンス	なし(掘削は盛土内)	なし		高槻市文化財年報 平成9年度/ H11.1.29
23	98-A	H11.3.1 ~3.3	985	梶原1丁H 255	奥谷 前	個人住宅	なし	瓦葺		高槻市文化財年報 平成10年度/ H12.2.28
24	1999-1	H11.11.15 ~11.19	247 (12)	梶原1丁H 277-2・276 の一部	末房 前	個人住宅	なし	なし	地山面は西南側に 向かって緩やかに 傾斜している	・船上通跡群24(高槻市文化財 調査報告XVI)/H12.3.27 ・高槻市文化財年報 平成11年 度/H13.2.28
25	1999-2	H11.12.21 ~12.22	1170 (9)	梶原1丁H 369-6・ 370-3	山本 前	個人住宅	なし	95点の瓦製の出土 (地山直上の砂礫・ 粗砂層より出土・ 軒平瓦1点、瓦瓦 34点、平瓦60点で 近世のものも若干 ながら、大半は7世 以後半から8世紀 のものと思われる)	掘出地内に3ヵ所 の調査区を設定	・船上通跡群24(高槻市文化財 調査報告XVI)/H12.3.27 ・高槻市文化財年報 平成11年 度/H13.2.28
26	2000-A	H13.3.9 ~3.15	1038	梶原1丁H 1・2	山本 前	寺院跡	築地層上面で土坑・小 穴	不明		高槻市文化財年報 平成12年度/ H14.3.29
27	2006-1	H19.1.19 ~1.22	296 (4)	梶原1丁H 261-1・ 261-2の 各一部	奥谷 前	個人住宅	なし	なし	本調査区までは被 削寺寺域は並み ず	・船上通跡群31(高槻市文化財 調査報告34)/H19.3.30 ・高槻市文化財年報 平成17・ 18年度/H20.3.26
28	2006-A	H19.2.22	110	梶原1丁H 368-2の 一部他	山本 前	個人住宅	なし(盛土内の掘削)	なし		高槻市文化財年報 平成17-18 年度/H20.3.26
29	2010-1	H22.7.30	400	梶原1丁H 1-31~10-6		水道工事	不明(盛土内の掘削)	不明		高槻市文化財年報 平成21・22 年度/H24.3.27
30	2010-2	H22.9.16 ~9.17	1170	梶原1丁H 394-1・ 394-2・ 396-2	梶ノ 木	個人住宅	暗渠	瓦等、土師器、須恵 器		高槻市文化財年報 平成21・22 年度/H24.3.27
31	2010-3	H22.11.29	100	梶原1丁H		下水道工	瓦葺	瓦、須恵器、土師器		高槻市文化財年報 平成21・22 年度/H24.3.27
32	2011-1	H23.5.23	894	梶原1丁H 1137	山本 前	個人住宅	古墳時代の溝込み	奈良時代の瓦・須恵 器等		高槻市文化財年報 平成23年度/ H25.3.15
33		H23.5.24		梶原1丁H (畑山神社 隣接地)	山本 前			礎石	畑山神社北東側の 宅地から数年前に 発見掘り出された もの	高槻公「日 梶原寺の礎石」 高槻市文化財年報 平成23年度/ H25.3.15
34	2011-2	H23.10.17 ~H24.3.31	450	梶原1丁H		下水道整 備	不明	奈良時代の瓦・須恵 器等		高槻市文化財年報 平成23年度/ H25.3.15
35	2011-3	H23.12.14	13	梶原1丁H		ガス管敷 設	不明	奈良時代の瓦・須恵 器等		高槻市文化財年報 平成23年度/ H25.3.15
36	2011-4	H23.12.22	39	梶原1丁H 315~6-22	山本 前	ガス管敷 設	不明	瓦		高槻市文化財年報 平成23年度/ H25.3.15
37	2012-1	H24.10.29 ~12.21	2700	梶原5丁H 地内		道路建設	不明 1~7トレンチあり	須恵器・瓦断片	東に向かって傾斜 し0.4m程度の沼 地状となる	高槻市文化財年報 平成24年度/ H26.3.30
38	2012-2	H 24.10.4	61	梶原1丁H 310~2-20	山本 前	ガス管敷 設	なし	なし		高槻市文化財年報 平成24年度/ H26.3.30
39	2012-3	H24.10.15 ~10.26	53	梶原1丁H 5-13~20	山本 前	ガス管敷 設	なし	なし		高槻市文化財年報 平成24年度/ H26.3.30
40	2012-4	H24.11.30 ~12.13	43	梶原1丁H 3~6	山本 前	ガス管敷 設	不明(盛土内の掘削)	不明		高槻市文化財年報 平成24年度/ H26.3.30
41	2012-5	H24.10.5	58	梶原2丁H 9-16~123		ガス管敷 設	不明(盛土内の掘削)	不明		高槻市文化財年報 平成24年度/ H26.3.30
42	2013-1	H 25.6.20	58	梶原2丁H 9-16		ガス管敷 設	なし	新瓦 (盛土内出土)		高槻市文化財年報 平成25年度/ H27.3.31
43	16-1 今次 調査	H29.1.5 ~2.22	215	梶原1丁H		道路建設	(縄文時代)溝 (平安時代)井戸	縄文土器・石器、 古墳・飛鳥・奈良 平安時代の土師器、 須恵器・瓦葺等、 梶原瓦葺瓦	近世の土石造成構 造あり	本書

された(『梶原瓦窯跡発掘調査報告書』)。計5基の窯跡と7世紀半ばの工房跡が見つかったことにより、梶原寺の創建が7世紀半ばに遡るものと想定される。また、伽藍についてもこの場所よりも東側に位置することが推定された。平成23年頃、早くから奈良時代前期の瓦が出土する場所として知られていた畑山神社境内の東側に隣接する民家から、金堂などの主要建物の柱を支えたと思われる礎石が見ついている。花崗岩製で、長辺1m、厚さ0.3m程度の長方体を呈し、上下2面に柱座を有する特異な礎石である。

これまで、四十数次に亘る調査が行われているが、そのほとんどが狭小な調査であり、瓦等の遺物が採集されてはいるが、梶原寺に関する遺構についての知見は極めて少ない。その実態はほとんど不明と言わざるを得ない。

第3章 調査の方法

第1節 現地調査

〔調査区〕 本調査では5箇所の調査区を設定し、1から5区とした(図3・5)。なお工程上、4・5区は二分割し、4区西半・東半、5区西半・東半として調査を行った。

〔現地調査〕 調査は、表土、盛土及び旧表土、包含物等から明らかに新しい時期に帰属すると判明した層等を機械力にて除去し、時期が明らかでない層については設計深度まで慎重に機械力にて掘削し、その後、人力にて掘削した。

人力による掘削は、スコップ・鋤簾等を使い、遺物包含層の掘削、遺構面の精査によって遺構を検出し、遺構面・遺構の確認及び遺物の採集に努めた。現地調査は、当センター作成マニュアル「遺跡調査基本マニュアル」2010に準拠して行った。

〔地区割り〕 遺構の位置確認や遺物の取り上げに関して、世界測地系に則った平面直角座標系第Ⅵ系を基準とし、ⅠからⅣの大小4段階の地区割りを設定した(図4)。これは大阪府域全体に共通する地区割りである。第Ⅰ区画は、大阪府の南西端を通る $X=-192,000$ ・ $Y=-88,000$ を起点に、府域を南北15(A～O)、東西9(0～8)区画に分割したもので、一区画が南北6km・東西8kmとなる。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を東西・南北各4分割し、計16区画(1～16)に分けたもので、一区画は南北1.5km・東西2.0kmとなる。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画を東西20(1～20)・南北15(A～O)に分割する一辺100mの

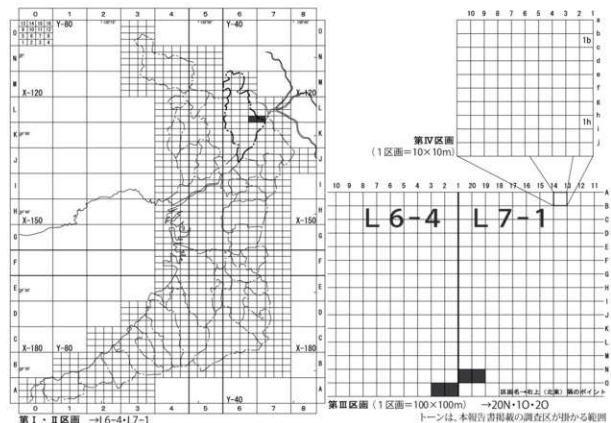


図4 地区割り

区画である。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画をさらに東西・南北に10分割した(東西1～10・南北a～j)一辺10mの区画である。上述の方法で区画した場合、今次調査で使用する第Ⅰ・Ⅱ区画は「L6-4」及び「L7-1」であり、第Ⅲ区画は「10」「20」及び「19N」「20N」となる。地区割りの詳細は図5に示した。

〔記録作業〕 調査では適宜、各トレンチの平・断面の実測、レベル測量、写真撮影を行った。実測図は平面図を100分の1、断面図を20分の1・10分の1で作成した。写真媒体は35mm黑白フィルム・35mmリバーサルフィルム・6×7黑白フィルムを使用した。また、写真台帳に使用するため、デジタルカメラによる撮影も併せて実施した。撮影に当たってはセンター所定の写しこみラベルに調査名・トレンチ名・撮影内容・撮影方向・撮影日時・撮影者を記載し、35mm黑白カメラで写し込みを行った。

出土遺物については、調査名・トレンチ名・層名・出土年月日・登録番号などを記したセンター所定のマイラーベースのラベルを添付し、トレンチ・包含層・遺構ごとに取り上げた。

なお、平面図の作成は、上述した世界測地系に則った平面直角座標系第Ⅵ系を用いている。方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面(T.P.)を用いた。このような現地作業における記録類は、A2判図面で29枚になる。

〔遺構番号〕 遺構の種類に関わらず、1から通し番号で振り、遺構の種類は遺構番号の後ろに付した。「1溝」、「2土坑」、「3ピット」という具合である。

〔基礎整理作業〕 現地調査と並行して、出土遺物の洗浄・注記、出土遺物の台帳作成、平面図・断面図の図面整理などの基礎整理も行った。遺物への注記は、マニュアルに従い、「カジワラテラ16-1-□」(□は遺物登録番号)として各遺物に記入した。破片が小さく記入できない場合や木製品等は、登録番号がわかるよう袋にまとめ、ラベルとともに封入した。台帳作成にはファイルメーカー社のFileMaker Pro 8を用いた。台帳にはデジタルカメラで撮影した写真データに加え、遺物に添付したラベルの情報及び遺物の内容などの情報を入力した。

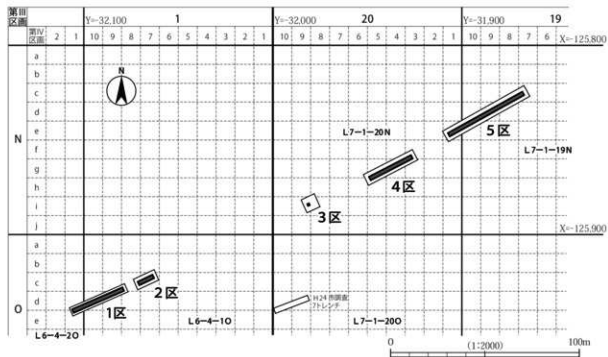


図5 地区割りと調査区配置

第2節 整理作業

整理作業の対象となった遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、灰釉陶器、陶磁器類、瓦、木器、石器、金属器などで、55×35×15cmの収納コンテナに、8箱である。これらの整理作業も、当センターマニュアル『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠して行った。

出土遺物は、遺構ごと、また包含層出土遺物については、近隣の地区とも確認しながら接合作業を行い、必要に応じて石膏を用いた遺物復元作業を行った。同時に実測可能な遺物をピックアップし、ピックアップしたものは順次実測作業を行い、瓦等については拓本をとった。遺物実測数は瓦や木製品等も含め約50点となった。実測した遺物については、遺物登録台帳とは別にピックアップ台帳を作成した。

上記の手順で作成した遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込み、Adobe社製IllustratorCS5を用いてトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本などのデータを貼り込み、挿図を作成した。最終的には実測した遺物のうちの48点を本書に掲載することとした。

遺構図は、原図を遺物同様の手順でデジタルトレースをし、主要遺構については、現地で作成した実測図を編集し、デジタルトレースにより挿図を作成した。報告書掲載の挿図は、遺構図・遺物実測図ともにデジタルデータによって作成した。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、デジタル化作業を行った。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別し実測作業の後、写真撮影し、デジタル化作業を行った。遺物写真については、中部調査事務所の写真室において撮影を行った。以上の作業と並行して報告文を作成し、編集作業を行った。また、編集作業と並行して出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、収納作業を行った。併せて、現地にて作成した遺構図面や撮影した遺構写真の整理・収納を行い、これらも台帳に登録した。



写真1 現地調査及び整理作業風景

第4章 調査成果

調査では、JR京都線の北側に計5箇所の調査区を設定し、1から5区とした。調査区の形状は1区が2m×29mの長方形、2区が2m×8mの長方形、3区が一辺1mの正方形、4区が2m×25mの長方形、5区が2m×45mの長方形である。調査面積の合計は215㎡であり、各調査区の内訳は以下のとおりである。

1区：58㎡、2区：16㎡、3区：1㎡、4区：50㎡、5区：90㎡

以下、調査区ごとに調査成果を報告する。

第1節 1区 (図6～9、写真図版1・5)

今次調査における西端の調査区であり、梶原寺跡の遺跡範囲の西端に位置する。東西方向に長い長方形を呈する。現状は水田が放棄されたような状況であり、土中に水分を多く含み、極めて湿潤な状況であった。現況の標高は8.6m。尚、当場所及びその以西はかつて池であったらしい。

1. 基本層序 (図6、写真図版1)

第1層：表土層。7.5YR5/1 褐色 極細砂質シルト。層厚0.15～0.3mを測る。現生植物の根が顕著。現況では耕作は行われておらず、放棄されている状況であった。地理院地図(GSI Maps)の1988から1990年の空中写真を見ると当地は水田である。旧耕土。

第2層：床土か。2.5GY6/1 オリーブ灰色 シルト質粘土。層厚0.1～0.25mを測る。

第3層：土石流による堆積層か。10Y5/1 灰色 粘質シルト混巨礫～細礫。層厚1.2m前後を測る。人頭大の礫多数あり。シルト～粘土ブロックも見られる。遺物多数包含。建築部材かと思われる木材等も含まれていた。調査区の位置から見て一乗寺川支浜からの土石流かと推測する。

第4層：N4/0 灰色 粘土。層厚は確認できていない。湧水が激しく、掘削が儘ならなかったため、西

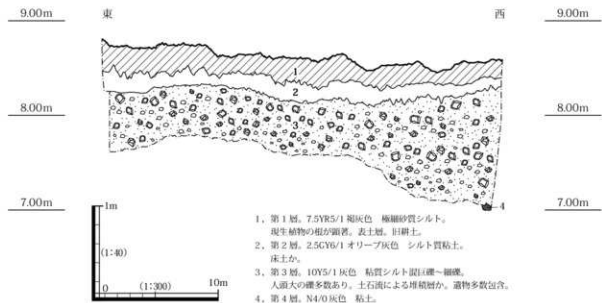


図6 1区 南壁断面

端でのみ当層を検出した。

II. 遺構と遺物(図7～9、写真図版1・5)

当調査区は湧水が激しく、壁面の崩落等の事由により調査が儘ならず、第3層とした砂礫の多く混じる堆積層の途中で掘削を終えている。幸うじて、調査区西端にお

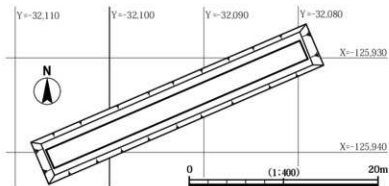


図7 1区 平面

いて、下層の第4層とした灰色粘土層を検出したが、いずれにしても遺構は確認できなかった。

当調査区では、機械掘削中及び第3層の砂礫の多く混じる堆積層から多くの遺物が出土した。土師器・須恵器・陶磁器・瓦・雁首銭等が出土した。このうち、実測可能なものを図化した。

1～4は土師器。1は杯。口縁端部内側を若干凹ませる。奈良時代の所産。2は椀。口縁部を回転ナデする。平安時代前期の所産。3は高杯脚部。外面を8面を取りする。平安時代前期の所産か。4は甕。口縁直下まで煤が付着する。平安時代前期の所産か。5～7は須恵器。5は杯身。古墳時代後期の所産。6は杯蓋。杯Gの蓋であり、飛鳥時代の所産。7は杯身。飛鳥時代の所産か。9～23は瓦。9～11は丸瓦。凹面には布目を残し、凸面は縦ナデするものがある。9は凹面側の側縁を、10・11は凹面側・凸面側の両側縁を面取りする。

12は軒平瓦。三重弧文の軒平瓦である。瓦当面に平行する2条の凹線を引くことで三重弧文としたものである。凹線の凹みは1～3mmの深さがあり均一ではなく、その幅についても3～5mmと一定していない。またその形状も逆台形やV字状であり、丁寧な仕事とは言えない。凹線は1条ずつ施したのではなく、2条を一度に施したものと解される。両側縁を面取りするが、凸面側に至っては、瓦当部分も面取りをしている。従来、梶原瓦窯の調査により、軒平瓦はA～H型式の8型式に大別されている。そのうち、三重弧文の軒平瓦はA～E型式に相当する。当資料は出土地点を鑑みて梶原瓦窯産の瓦であることは明らかであるので、高槻市教育委員会のご高配を得て、梶原瓦窯出土瓦との比較検討を行った。その結果、凹線の状況と頸の長さ、瓦当面の大きさから梶原A型式とされる三重弧文軒平瓦に相当するものと判定した。尚、梶原A型式は頸の段の処理の仕方によってA1型式とA2型式に2分されているが、当資料は、そのどちらでもない。凹線の状況と瓦当面の大きさはA1により近いものの評価ができるが、全体を見た場合、どちらにも属さない、A型式の中で細分される新たな型式の軒平瓦になるのではないかと推定する。

13～23は平瓦。13～15は凸面に縄目タタキの痕跡を持つもの。16・17は凸面に斜格子タタキ目を持つもの。19～23は凸面横ナデするもの。平瓦については、側縁を面取りするものの割合が高い。

8は雁首銭と考えられる金属製品である。煙管の雁首にある火皿を叩き潰して板状にしたもので、銅製かと思われる。煙道とは別にもう一つ空気孔があることから、古手の煙管の蓋蓋性が高い。

49は灰釉陶器。高台を有する器種の破片と思われる。

第3層は、人頭大～拳大の礫が多数包含されており、シルト～粘土ブロック等も見られることから、土石流による2次的な堆積層と判断した。土石流が起きた年代は、近世所産の遺物も少量含まれるため、

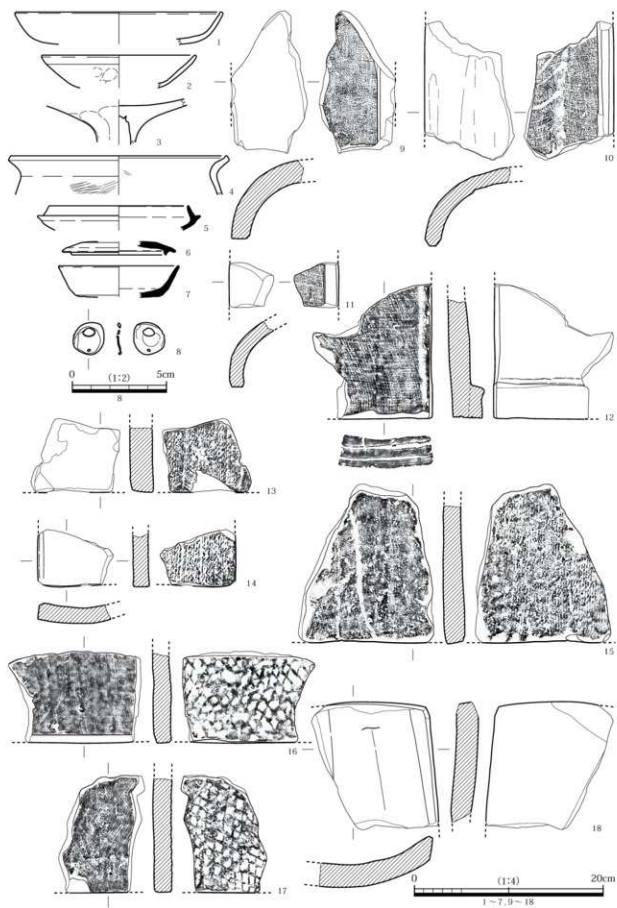


图8 1区 出土遗物(1)

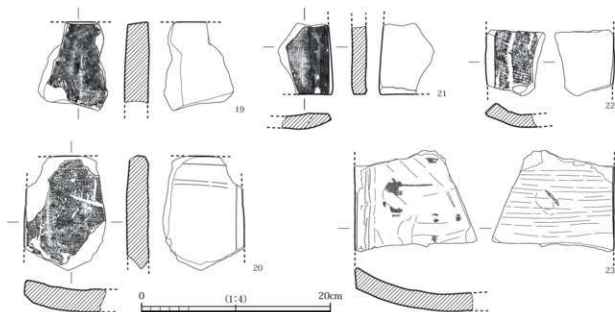


図9 1区 出土遺物(2)

近世頃に求めるのが妥当と判断する。ただし、土石流については複数回に亘ることも想定されたが、土層断面での分層や認識をすることができなかった。第3層から出土した遺物は、おそらく上流から運ばれてきたものであろうが、古墳～平安時代の各時期の遺物が見られたことから、それぞれの時期の集落が付近に存在することは疑いない。

第2節 2区(図10～12、写真図版1・6)

1区の東側に位置する調査区である。1区と旧国鉄の保線関係の作業場があったとされる高まりに挟まれた場所にある。東西方向に長い長方形を呈する。現状は1区よりも一段高くなる場所であるが、ガマが生い茂り土中に水分を多く含み、極めて湿潤な状況であった。現況の標高は9.2m。

1. 基本層序(図10、写真図版1)

第1層:表土層。5YR4/1 褐灰色 粘質シルト。層厚0.4～0.5mを測る。現生植物の根が顕著。現況では耕作は行われておらず、放棄されている状況であった。地理院地図(GSI Maps)の1988から1990年

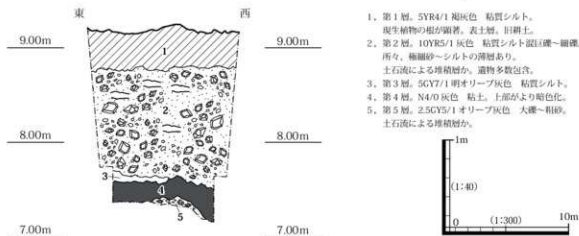


図10 2区 南壁断面

の空中写真を見ると当地は水田である。

第2層：土石流による堆積層か。10YR5/1 灰色 粘質シルト混巨礫～細礫。所々、極細砂～シルトの薄層あり。層厚1.1～1.2mを測る。遺物多数包含。調査区の位置から一乗寺川支溪からの土石流かと推測する。1区の第3層と同一層である。

第3層：自然堆積層か。5GY7/1 明オリーブ灰色 粘質シルト。層厚0.1m前後を測る。

第4層：自然堆積層か。N4/0 灰色 粘土。上部がより暗色化。層厚0.2～0.4mを測る。

第5層：土石流による堆積層か。2.5GY5/1 オリーブ灰色 大礫～粗砂。層厚は確認できていない。

II. 遺構と遺物 (図11・12、写真図版6)

当調査区において、遺構は確認できなかった。当調査区では、機械掘削中及び第2層の砂礫の多く混じる堆積層から多数の遺物が出土した。土師器・須恵器・瓦が主なものである。このうち、実測可能なものを図化した。

24は土師器。高杯脚部で三方に円形の透かしを持つ。内面に棒状工具痕が見られる。古墳時代中期の所産。25・26は須恵器。25は杯B。26は杯か。27～29は瓦。27は丸瓦。凸面縦ナデか。丁寧に側縁の面取りをする。行基丸瓦である。28は平瓦。凸面摩耗するが、横ナデか。丁寧に側縁の面取りをする。29は平瓦。凸面斜格子タタキ目を持つ。斜格子が扁平で長方形を呈する点で他の斜格子タタキ目は異なる。『梶原瓦窯跡発掘調査報告書』に掲載されているいずれの斜格子タタキ目にも合致しない。

当区第2層は、1区第3層と同一層であり、近世期の土石流である蓋然性が高い。また、その下層にも別の土石流の堆積層が認められたことから、複数次の土石流が起きていた可能性がある。

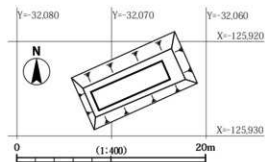


図11 2区 平面

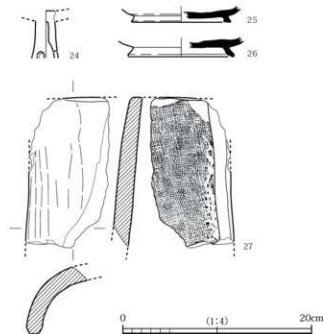
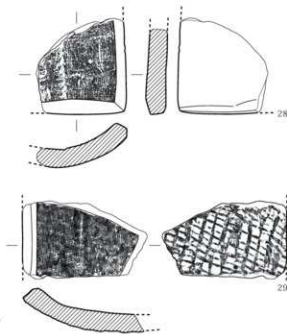


図12 2区 出土遺物



当調査区では、複数次の土石流堆積と、その間に堆積したであろう自然堆積層を検出したに止まる。付近の試掘調査結果によると標高6.5～7.0m付近で砂層が検出されている。地形的に周辺よりも低い場所に当たっており、元来低地であったところが、近世期の土石流により埋積し、周囲との高低差が解消され、ある程度の平坦化が成されたものと推測できる。

第3節 3区 (図13・14、写真図版1)

今次調査の中央に位置する調査区である。現況の標高は10.6mであり、もっとも高い場所に位置する。現状は碎石が敷かれ、駐車場として使用されていた。

1. 基本層序 (図13、写真図版1)

盛土層: 層厚1.4～1.5mを測る。盛土が成された時期は不明であるが、コンクリート片等が混じる。地理院地図(GSI Maps)の1974～1978年の空中写真では盛土は見られないことから、それ以降のものと考えられる。

第1層: 旧表土層。7.5Y2/1 黒色 細砂質シルト。層厚0.1m前後を測る。

第2層: 作土層か。5B65/1 青灰色 細砂混粘質シルト。層厚0.2～0.3mを測る。

第3層: 洪水堆積層か。2.5GY7/1 明オリーブ灰色 極粗砂～細砂、シルト。層厚0.1m前後を測る。

第4層: 7.5Y6/1 灰色 細礫～極細砂混極細砂質シルト。層厚0.25～0.3mを測る。

第5層: 土石流による堆積層か。5B6/1 青灰色 細～極細砂質シルト混中礫～極粗砂。層厚0.6m前後を測る。土師器の小片が1点出土した。

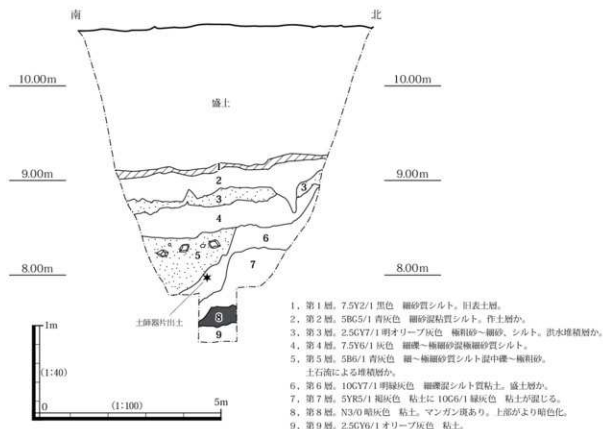


図13 3区 西壁断面

第6層:盛土層か。10GY7/1 明緑灰色 細礫混シルト質粘土。層厚0.25mを測る。土師器と須臾器の小片が1点ずつ出土した。

第7層:5YR5/1 褐灰色 粘土に10G6/1 緑灰色 粘土が混じる。層厚0.15～0.5mを測る。

第8層:自然堆積層か。N3/0 暗灰色 粘土。マンガン斑あり。上部がより暗色化。層厚0.2mを測る。

第9層:自然堆積層か。2.5GY6/1 オリーブ灰色 粘土。層厚は確認できていない。

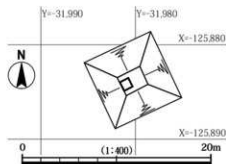


図14 3区 平面

II. 遺構と遺物 (図14)

当調査区は極めて狭小なトレンチであったため、明確な遺構は確認できなかったが、基本層序第5・6層から土師の小片が出土した。図化し得なかったが、古代以降の所産と考えられる。

尚、当調査区では、断面の検討の結果、第6・7層が南に向かって落ち込む状況が確認できた。その南側の低まりに、土石流による堆積層かと考えられる第5層が見られ、その時点である程度の地形の平坦化が成されたことが想定される。尚、第6層については、土質の状況から盛土の可能性が高い。これらを総合的に考えると、この場所に段もしくは高まり、或いはその両方があった蓋然性が高い。後述の4区の西端断面では、同じような標高で、似たような高まりが確認できており、一連のものになる可能性がある。その場合、時期は不明であるが、概ね東西方向に堤状の高まりがあったものと想定できる。

第4節 4区 (図15～18、写真図版1・6)

今次調査の東半に位置する調査区である。東西方向に長い長方形を呈する。現状は草が生い茂り、放棄されたような状況であった。現況の標高は9.3m。

1. 基本層序 (図15、写真図版1)

真砂土層:層厚0.1～0.3mを測る。現況では耕作は行われておらず、放棄されている状況であった。地理院地図(GSI Maps)の1988から1990年の空中写真を見ると当地は水田である。地元の方の話では、J R 京都線の線路脇が大雨で崩れた時(平成24年8月のこと)に、復旧工事が行われ、その時に持ち込まれたものようである。

第1層:旧表土層。7.5YR3/1 黒褐色 中～細礫混極細砂質シルト。層厚0.1～0.4mを測る。

第2層:作土層か。3層に細分される。(上層)10BG6/1 青灰色 中～細礫混粘質シルト。層厚0.1～0.15mを測る。(中層)7.5YR6/2 灰褐色 極粗砂混極細砂質シルト。層厚0.15m前後を測る。(下層)5Y6/2 灰オリーブ色 細礫混粘質シルト。層厚0.1～0.2mを測る。

第3層:土石流による堆積層か。10YR5/2 灰黄褐色 中～細砂質シルト混中～細礫。層厚0.1～0.2mを測る。後述の5区第2層と同一層と想定される。

第4層:作土層か。2層に細分される。(上層)2.5Y6/1 黄灰色 粗砂混粘質シルト。層厚0.15～0.2mを測る。(下層)5Y7/1 灰白色 細礫混シルト質粘土。層厚0.1～0.25mを測る。腐植物若干混じる。下層の上部が土壌化したものが上層と考えられる。

第5層：自然堆積層か。3層に細分される。(上層①)7.5YR6/1 褐灰色 粘質シルト。層厚0.1m前後を測る。よく締まる。(上層②)5B6/1 青灰色 粘土に5YR4/1 褐灰色 粘土ブロック混じる。層厚0.1m前後を測る。(下層)10YR5/3 にぶい黄褐色 中砂質シルト。層厚0.1～0.3mを測る。下層の上部が土壌化したものが上層と考えられるが、上層①と上層②では若干土質が異なる。

第6層：自然堆積層か。2.5Y6/1 黄灰色 粘土。層厚0.1～0.2mを測る。

第7層：自然堆積層か。2.5Y8/3 淡黄色 粘土と2.5Y6/1 黄灰色 粘土の互層。層厚0.1～0.15mを測る。

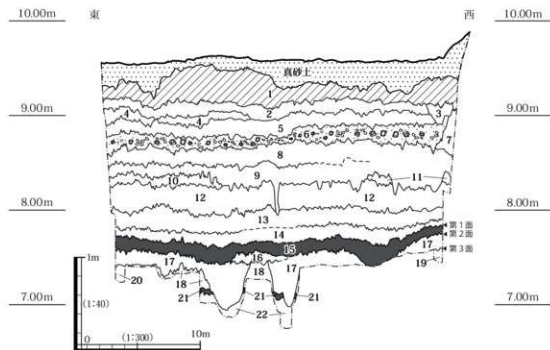
第8層及び1 落込み・5 溝埋土：自然堆積層か。N3/0 暗灰色～N4/0 灰色 粘土。層厚0.1～0.2mを測る。磨製石斧出土。

第9層及び6 溝埋土：自然堆積層か。5Y6/1 灰色 粘土。層厚0.1～0.2mを測る。所々腐植物が混じる。

第10層：自然堆積層か。N7/0 灰白色～7.5Y6/1 灰色～10YR7/2 にぶい黄褐色 粘土。層厚0.2～0.3mを測る。無遺物。

第11層：自然堆積層か。2.5Y7/2 灰黄色 粘土。層厚0.05～0.1mを測る。無遺物。

第12層：自然堆積層か。N3/0 灰色 粘土。層厚は確認できていない。無遺物。



- | | |
|---|--|
| 1. 第1層。7.5YR3/1 黒褐色 中～細礫混極細砂質シルト。旧表土層。 | 12. 第5層。10YR5/3 にぶい黄褐色 中砂質シルト。 |
| 2. 第2層。10B6/1 青灰色 中～細礫混粘質シルト。作土層か。 | 13. 第6層。2.5Y6/1 黄灰色 粘土。 |
| 3. 遺構埋土。5CY6/1 オリーブ灰色 細砂とシルトブロック混合。 | 14. 第7層。2.5Y8/3 淡黄色 粘土と2.5Y6/1 黄灰色 粘土の互層。 |
| 4. 第2層。7.5YR6/2 灰褐色 極粗砂混極細砂質シルト。作土層か。 | 15. 第8層及び1 落込み・5 溝埋土。N3/0 暗灰色～N4/0 灰色 粘土。磨製石斧出土。 |
| 5. 第2層。5Y6/2 灰オリーブ色 細礫混粘質シルト。作土層か。 | 16. 2.5CY6/1 オリーブ灰色 粘土。マンガン痕跡者。6 溝埋土か。 |
| 6. 第3層。10YR5/2 灰黄褐色 中～細砂質シルト混中～細礫。土石流による堆積層か。 | 17. 第9層及び6 溝埋土。5Y6/1 灰色 粘土。所々腐植物が混じる。 |
| 7. 5B6/1 青灰色 粘土にN5/0 灰色 粘土ブロック混じる。盛土層か。 | 18. 第10層。7.5Y6/1 灰色 粘土。 |
| 8. 第4層。2.5Y6/1 黄灰色 粗砂混粘質シルト。作土層か。 | 19. 第10層。N7/0 灰白色 粘土。 |
| 9. 第4層。5Y7/1 灰白色 細礫混シルト質粘土。 | 20. 第10層。10YR7/2 にぶい黄褐色 粘土。 |
| 10. 第5層。7.5YR6/1 褐灰色 粘質シルト。よく締まる。 | 21. 第11層。2.5Y7/2 灰黄色 粘土。 |
| 11. 第5層。5B6/1 青灰色 粘土に5YR4/1 褐灰色 粘土ブロック混じる。 | 22. 第12層。N3/0 灰色 粘土。 |

図15 4区 南壁断面

II. 遺構と遺物（図16～18、写真図版1・6）

当調査区では、3面の調査を行った。

〔第1面〕 第8層とした黒色粘土層上面を第1面として調査したが、遺構は検出されなかった。

〔第2面〕 第8層の下面を第2面として調査した。1落込みと5溝を検出した(図16)。

1落込みは、 $X = -125.869$ 、 $Y = -31.944$ 地点に位置する。南部が調査区外になるため、全容は明らかでない。検出した部分の規模は長径5.7m、短径1.6mを測り、平面楕円形になると思われる。断面形は血形で、深さ0.18mを測る。遺物は出土していない。

5溝は、東部が調査区外になるため全容は明らかでないが、東-西方向を指向する。検出した部分の規模は、幅0.8～1.2m、深さ0.1mを測り、検出長約12mである。断面形は血形。なお、第8層掘削中に、当溝の直上位置で磨製石斧(30)が出土した。

磨製石斧(30)は、上部を欠損するが、いわゆる定角式磨製石斧であろう。側縁はやや丸みを帯びるが、側面はほぼ平らであり、長方体を意識して作られ扁平である。また、側縁は左右対称にならず、片側は刃部に対しほぼ直角であるのに対し、もう一方はやや鋭角になる。蛇紋岩製。縄文時代後・晩期の所産と思われる。

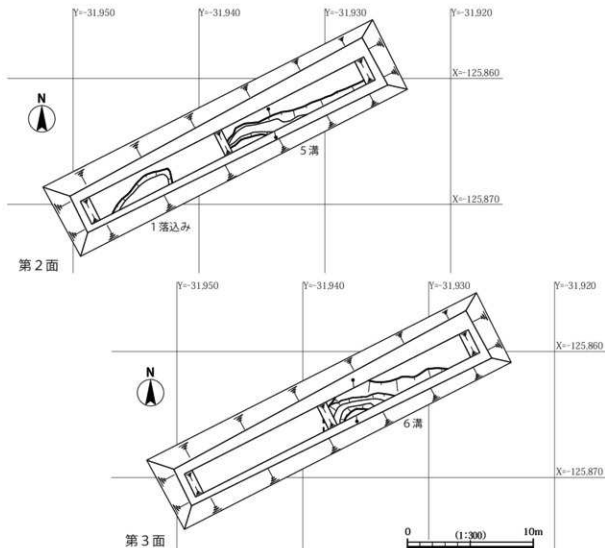


図16 4区 第2・3面 平面

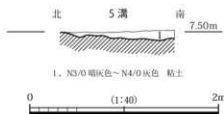


図17 4区 5・6溝 断面

1 落込み及び5溝は、いずれも第8層が埋土になっており、第8層も含めて一連の堆積状況が想定される。調査区が狭小なため、このような検出となったが、巨視的にみると大きな溝の最深部や低まりの最深部という可能性もあり、第8層自体が何かしらの埋土ということもあり得る。

〔第3面〕第9層の下面を第3面として調査し、6溝を検出した(図16)。

6溝は、東部及び南部が調査区外になるため全容は明らかでないが、東-西方向を指向する。X=-125.865、Y=-31.938地点で方向を南へ変える。検出した部分の規模は、幅2.4m、深さ0.34mを測り、検出長約10mである。断面形は楕円形。埋土に腐植物が多く見られ、レンズ状に堆積していたことから、自然下に埋没したものと考えられる。

なお、第2面検出5溝と第3面検出6溝は位置を同じくしており、一連の埋没過程を、掘り分けたものである蓋然性が高い。この想定が妥当であれば、当調査区の場所は谷地形のような低い場所に当たり、徐々に埋積する状況下にあったものと推定する。

第5節 5区 (図19～26、写真図版2～4・6)

今次調査の東端に位置する調査区である。東西方向に長い長方形を呈する。現状は水田が放棄されたような状況であり、土中に水分を多く含み、極めて湿潤な状況であった。現況の標高は高いところで9.8m、低いところで9.5mを測り、東側が一段高くなる。

1. 基本層序 (図19、写真図版2)

真砂土層：層厚0.05～0.1mを測る。

第1層：表土層。7.5YR3/1 黒褐色 中～細礫混細砂質シルト。層厚0.1～0.46mを測る。

第2層：土石流による堆積層か。2層に細分される。(上層)7.5YR6/3 にぶい褐色 シルト混大礫～極粗砂。遺物多数包含。層厚0.8～1.2mを測る。(下層)5B6/1 青灰色 大礫～極粗砂。遺物多数包含。さらに細分される可能性もあったが、層の境が不明瞭で2層に細分するに止めた。調査区の位置から推定すると一乗寺川からの土石流の蓋然性が高い。

第3層：湿地状堆積か。7.5YR5/2 灰褐色 粗砂～中砂混粘質シルト。当層の下面かなり乱れる。腐植物及び腐葉が混じる。黒色土器(43)が出土した。層厚0.15～0.3mを測る。

第4層：2層に細分される。上層は自然堆積層か。5PB6/1 青灰色 粗砂質粘土。層厚0.15～0.3mを測る。

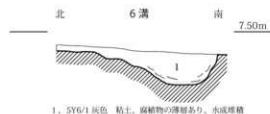
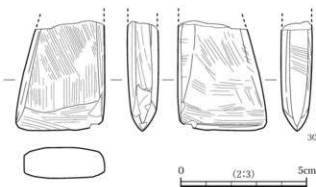
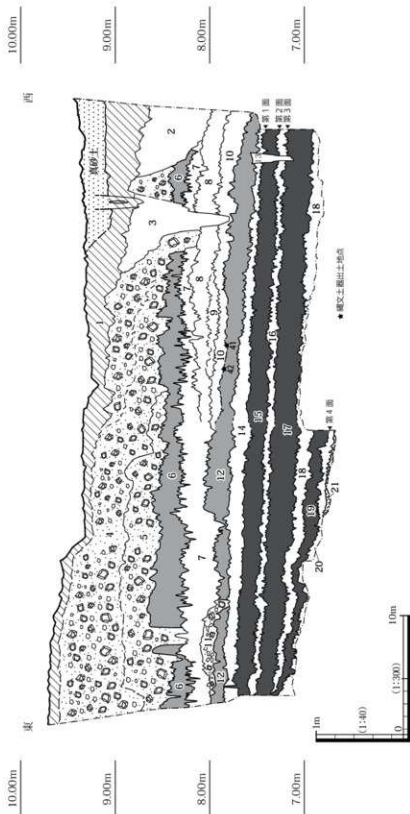


図18 4区 出土遺物





1. 第1層, 7.5YR3/1 黒褐色, 中〜細礫混在の質シルト, 目状土層。
2. 遺構(土坑小) 埋土, 5YR5/2 灰褐色, 粘土プロック混在層。
3. 遺構(土坑小) 埋土, N6の灰色, 礫混粘土〜シルトプロック。
4. 第2層, 7.5YR6/3 に近い, 褐色, シルト混大礫〜粗粒砂, 土石層による層積層か, 遺構多数混在。
5. 第3層, 5B6/1 黄灰色, 大礫〜粗粒砂, 土石層による層積層か, 遺構多数混在。
6. 第4層, 7.5YR5/2 灰褐色, 粗砂〜中砂混在質シルト, 当該の下部から見れる。粗粒物及び粗面分層に於ける, 混地状層積か。
7. 第4層, 5P8/1 黄灰色, 粗砂質粘土, 混地状層積か。
8. 第5層, 5P8/1 黄灰色, 粘土, マンガン混在層, 細まり良い, 鉄分及び銅混在で黄褐色を呈する部分もある。
9. 第5層, 7.5Y7/1 明緑灰色, 粘土。
10. 第6層, N4の灰色, 粘土。
11. 第4層, 5B5/1 黄灰色, シルト混大礫〜粗砂, 土石層による層積層か。
12. 第7層, 10YR5/1 褐色, 粘土, 層厚部から埋文土層片が出土した。
13. 8 遺構埋土, N6/0 灰色, 粘土プロック混在層。
14. 第8層, 2.5YR6/1 オリーブ灰色, シルト質粘土。
15. 第9層, 7.5YR5/1 褐色, 粘土。
16. 第10層, 5YR3/1 オリーブ黄色, 粘土。
17. 第11層, 10YR4/1 褐色, 粘土。
18. 第12層, 5YR3/1 オリーブ黄色, 粘土。
19. 第13層, 10YR4/1 褐色, 粘土。
20. 第14層, 5Y7/3 浅褐色, シルト質粘土。
21. 第15層, 5Y8/1 灰白色, 粗粒砂〜中砂。

図 19 5 区 南壁断面

下層は土石流による堆積層か。5B5/1 青灰色 シルト質大礫～粗砂。調査区の位置から一乗寺川からの土石流の蓋然性が高い。層厚0.15m前後を測る。

第5層：2層に細分される。(上層)5PB5/1 青灰色 粘土。マンガン斑顕著。締まり良い。鉄分沈着顕著で黄褐色を呈する部分もある。層厚0.2～0.3mを測る。(下層)7.5GY7/1 明緑灰色 粘土。層厚0.1～0.2mを測る。

第6層：自然堆積層か。N4/0 灰色 粘土。層厚0.1m前後を測る。

第7層：自然堆積層か。10YR5/1 褐灰色 粘土。層厚0.1～0.2mを測る。なお、南壁面の第6層と第7層の層理面で縄文土器(41・42)が出土した。

第8層：自然堆積層か。2.5GY6/1 オリーブ灰色 シルト質粘土。層厚0.1～0.2mを測る。無遺物。

第9層：自然堆積層か。7.5YR5/1 褐灰色 粘土。層厚0.1～0.2mを測る。無遺物。

第10層：自然堆積層か。5Y6/3 オリーブ黄色 粘土。層厚0.1m前後を測る。無遺物。

第11層：自然堆積層か。10YR4/1 褐灰色 粘土。層厚0.1～0.3mを測る。無遺物。

第12層：自然堆積層か。5Y6/3 オリーブ黄色 粘土。層厚0.05～0.1mを測る。無遺物。

第13層：自然堆積層か。10YR4/1 褐灰色 粘土。層厚0.1m前後を測る。無遺物。

第14層：自然堆積層か。5Y7/3 浅黄色 シルト質粘土。層厚0.1m前後を測る。無遺物。

第15層：洪水堆積層か。5Y8/1 灰白色 極粗砂～中砂。層厚不明だが0.8m以上ある。

II. 遺構と遺物 (図20～26、写真図版2～4・6)

〔第1面〕第9層の上面を第1面として調査した。調査区西端で7土坑及び8溝を、東半で2井戸を検出した(図20)。

7土坑と8溝は、巨大な土坑を掘削した後、その底部平坦面の外周に溝を掘削したものと考えられるので、土坑と溝は一連のものとして捉えた方がよいものである。本来、径10m程度の土坑であった可能性がある。なお、当遺構は、断面の観察から第2層を除去した面で検出できるものである。埋土は第2層と同様の土層であった。埋土から土師器・須恵器・瓦・陶磁器等が出土した。近世期と考えられる陶器片が含まれるため、近世に属する遺構の蓋然性が高い。

2井戸は、X=-125.830.5、Y=-31.878 地点に位置する。規模は長径1.16m、短径1.1mを測り、平面不整形円形を成す。断面形は砲弾形で、検出面からの深さ1.7mを測るが、本来の切込み面は、後述するようにさらに上方になるものと考えられる。基本層序第15層とした砂層で掘削を終えていることから、当層が湧水層であったと推定できる。井戸の掘方内から、曲物を5段積み重ねた井戸筒を検出した。ここで、曲物を下から順に1段目、2段目と呼称し、井戸の造営についての所見をまとめておく。

最下段の1段目の曲物は高さ9cm、2段目の曲物は高さ14cmと、上半の3～5段目の曲物に比べて浅いものを使用しており、2段目までを据えた状態で裏込めの土を入れている(図21断面図の5.)。この5層中から平瓦(36)が出土した。尚、1段目の曲物を据えるのに拳大の石をいくつか噛ませていた状況が看取できた。その後、3段目を据えて再び裏込めの土を入れている(図21断面図の4.)。この4層中から、丸瓦(35)が出土した。4層には礫が多く含まれていた。その後、4段目・5段目の曲物を据えるのであるが、その際、おそらく4段目を据えた後、裏込めの土を入れていると思われるが、断面では明瞭に分層できなかった。しかし、4段目を据えた後、折敷の底板と思われる板材を5段目の曲物との間に挟み込んでいることから、この状況は復元し得るものであろう。

さて、上述のように4・5段目の間には、折敷の底板と考えられる板材2枚(39・40)を、L字状に組んで挟み込んでいる。その外側(掘方内)に大きくはみ出した部分から、土師器皿(34)が1点出土した。土師器皿は、板材から若干干いた状態ではあったが、板材の上に据え置いたものと判断できる状況であった。これは、井戸の造営に際し、最終段階に当たる5段目の曲物を据えるに当たり、何らかの祭祀行為があった痕跡と推定する。類例は不明であるが、井戸の完成に伴って執り行われる祭祀になるうか。その後、5段目の曲物を半分程度裏込めし、井戸として完成させたものと推測する。なお、3～5段目の曲物は高さ30cmのものであった。これらは、検出時に崩壊し、取り上げることができなかった。

井戸上半は拳大の礫が多く混じり、基本層序第3層及び第4層かと判断されるブロック土が若干混じる上等で埋没しており、井戸筒内は、礫が多く混じる粘質シルトで埋没していた。そのため、当井戸の本来の帰属面は第2層下面になる蓋然性が高い。そして、井戸筒内は、最下段の1・2段目の内部も、

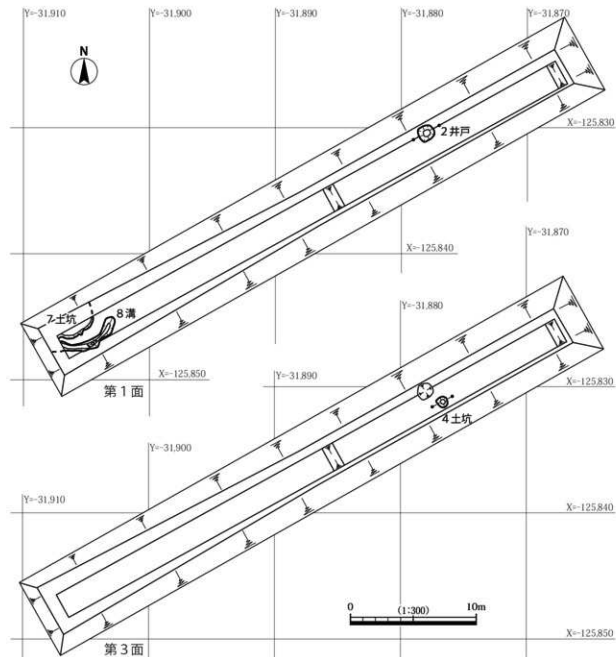


図20 5区 第1・3面 平面

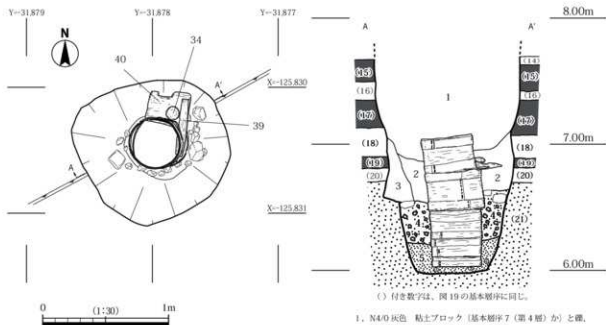
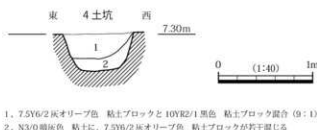


図21 5区 2井戸 平・断面



1. 7.5Y6/2灰オリーブ色 粘土ブロックと10YR2/1黒色 粘土ブロック混合 (9:1)
2. N3/0暗灰色 粘土に、7.5Y6/2灰オリーブ色 粘土ブロックが若干混じる

図22 5区 4土坑 断面

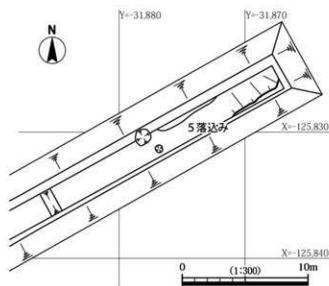


図23 5区 第4面 平面

- () 付き数字は、図19の基本層序に同じ。
1. N4/0灰色 粘土ブロック (基本層序7 (第4層) か) と硬、基本層序6 (第3層) ブロックの混合
 2. 7.5Y7/1灰色 軽砂質粘土
 3. 基本層序17・18・19が崩り落ちたもの
 4. N4/0灰色 軽質粘土
 5. N7/0灰色 極細砂～中砂 (井戸筒の下に傘大の窪みあり)

ほぼ礫混じりの粘質シルトで充填されており、いわゆる機能時の堆積と思われる土層がほとんど見られなかった。その埋土の状況から、当井戸は造営後、比較的早い段階で土石流により埋没した可能性がある。

埋土(図21断面図の1.)から須恵器、瓦器等が出土した。そのうち実測可能なものを図化した。

31～33は瓦器椀。31・32は楠葉型。内面は共にほとんど隙間なく密にミガキを施すが、外面は32が若干ミガキが粗い。33は和泉型。内外面ともにほとんど隙間なくミガキを施す。また、外面はミガキの前にケズリを施す。11世紀後葉～12世紀前葉の所産。

裏込め土から先述の土師器、瓦が出土した。34は土師器皿。口縁での字状。11世紀後半の所産。35・36は瓦。35は丸瓦。36は平瓦。凸面に斜格子タタキ目が遺る。梶原瓦窯産か。また、井戸枠及び関連遺物として39・40の折敷底板がある。これは、元は同じものであり、接合したところ、裏面

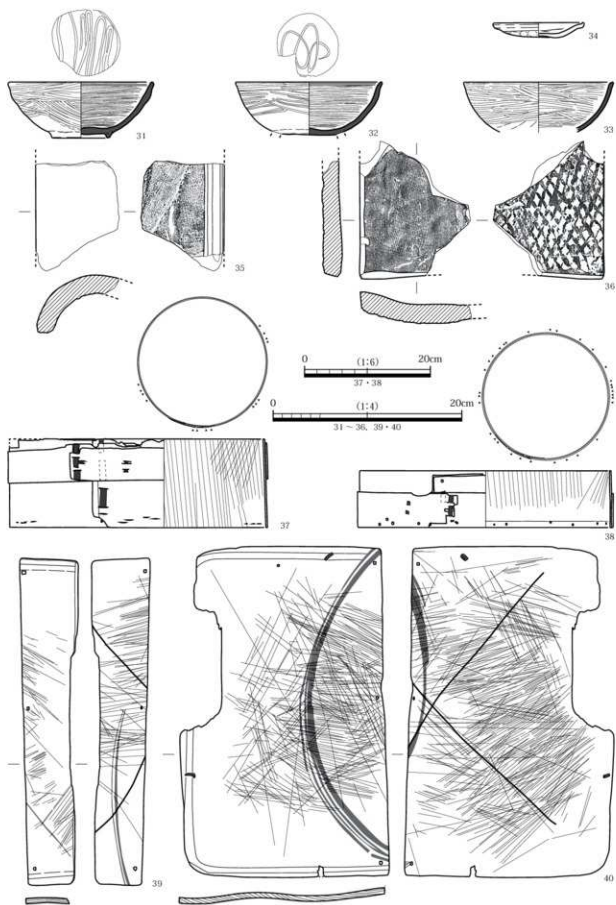


图24 5区 2井戸 出土遺物



図25 折敷の復元

の×印及び細かな刃物痕跡が一致した(図25)。補修痕跡が見られることから、折敷として使用後、俎板に転用、破損、修復し、何かに使用していたものを、最終的に井戸の造営祭祀に使用したものと推定する。

出土した遺物から、平安時代後期に属する井戸と考えられる。

〔第2面〕第9層の下面を第2面として調査したが、遺構は検出できなかった。

〔第3面〕第10層の下面を第3面として調査した。4土坑を検出した(図20)。

4土坑は、 $X=-125.831$ 、 $Y=-31.877$ 地点に位置する。規模は長径0.72m、短径0.68mを測り、平面不整形円形を成す。断面形は椀形で、深さ0.4mを測る。埋土はブロック土を主体とする。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

〔第4面〕第13層の下面を第4面として調査した。5落込みを検出した(図23)。北側に向かって低くなる落込みであり、丘陵に沿って谷筋があった可能性がある。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

当調査区では上述したもの以外にも、機械掘削中及び特定可能な堆積層から遺物が出土した。縄文土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦が主なものである。このうち、実測可能なものを図化した。

41・42は縄文土器。41は深鉢の口縁部かと考えられる小片。内外面とも摩滅著しい。42は宮滝式かと推定される深鉢の口縁部片。この2点は同じ層理面から出土しているため、時期も概ね同じと想定され、縄文時代後期後葉の所産と判断する。尚、2井戸埋土からも縄文土器片が1点出土した(50)。43は黒色土器A類。平安時代前期の所産か。44・45は須恵器。44は蓋。45は杯。奈良～平安時代前期の所産か。46～48は瓦。46は丸瓦。47・48は平瓦。

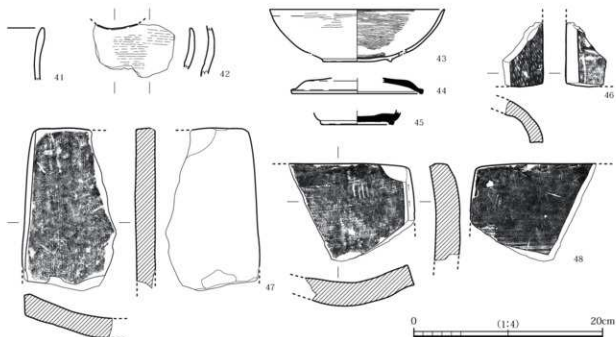


図26 5区 包含層 出土遺物

表3 掲載遺物一覧(1)

遺物番号	写真掲載番号	種別	器形	調査区	遺物名	番・器名	法量(単位:cm)			残存率(%)	調整等(ヨコナデ・横ナデは省略)成形及び調整の特徴等	外色調	備考
							口径	底径・幅	器高・厚				
1	8	5	土師器	杯	1	機械部の中	(21.6)	(3.4)	10以下	内外面摩滅 断面中央赤色粘着層 断面若干内側に肥厚	5YR7/4 に近い黄	平城IVか	
2	8	5	土師器	碗	1	機械部の中	(16.2)	(3.45)	10以下	内外面摩滅 外面:ユビオサエ	5YR6/6 橙	平安日中か	
3	8	5	土師器	高杯	1	第3層		(4.8)	10以下	膝部 内:ヘラズリか 外:面取り8面	2.5Y7/2 灰黄	平安前期か	
4	8	5	土師器	甕	1	機械部の中	(22.8)	(4.1)	10以下	外:7ハケ 断面内側に肥厚	10YR6/3 に近い黄	畑が1海浜下まで付着 平安日か	
5	8	5	須恵器	杯身	1	第3層	14.7	(2.6)	15		N6/0 灰	立ち上がり高1.1cm TK209型式か 自然釉あり 蓋との重ね焼き痕あり	
6	8	5	須恵器	杯蓋	1	第3層	(9.9)	(1.4)	10以下	かえり高0.4cm 径12.0cm 外:ヘラズリ	N7/0 灰白	杯G蓋 飛鳥日一Ⅲ	
7	8	5	須恵器	杯	1	第3層	(12.6)	(3.3)	20	外:回転ヘラズリ	N6/0 灰	杯Gか杯A 飛鳥日一IVか	
8	8	5	金属	鎌首抜か	1	第3層	1.7		100		2.5YR5/6 明赤褐	厚1mm前後、2ヵ所孔あり、割破か、煙管の火眼を潰して作ったもの、火眼に空気があがることから古手の焼物の可能性大	
9	8	一	瓦	丸瓦	1	第3層	(15.1)	(8.0)	(8.25)	10	四面:布目(1cm四方8~9本) 凸面:摩滅	N8/0 灰白	最大厚2.3cm
10	8	5	瓦	丸瓦	1	機械部の中	(14.7)	(9.5)	(8.3)	10	四面の布目が垂れ下がっていることから天地を決定 面取り一凹・凸面無縁 四面:布目糸8本/1cm	10YR7/2 に近い黄	最大厚1.7cm
11	8	一	瓦	丸瓦	1	第3層	(4.7)	(4.7)	(6.9)	10以下	四面:布目糸7本/1cm 面取り一凹・凸面無縁	10YR7/4 に近い黄	最大厚1.5cm 褐色糸の上がり
12	8	5	瓦	軒平瓦	1	第3層	(14.0)	(12.5)	20	三重瓦文 四縁2本(最小幅3mm 最大幅5mm) 四面:布目糸7× 12本/1cm 桶巻作り 面取り一凹・凸面無縁 凸面:アゴ部分狭くナデる	N7/0 灰白	平瓦部最大厚2.2cm 軒平部最大厚3.5cm 棟原A型式	
13	8	5	瓦	平瓦	1	機械部の中	(7.8)	(9.4)	10以下	凹凸面広縁の面取りなし 四面:摩滅 凸面:縄目タタキ	N6/0 灰	最大厚2.4cm	
14	8	一	瓦	平瓦	1	第3層	(6.0)	(8.0)	10以下	四面:若干平目残る 凸面:縄目タタキ	N6/0 灰	最大厚1.7cm、断面セピア色、須恵質焼成	
15	8	5	瓦	平瓦	1	機械部の中	(16.8)	(14.3)	20	広縁の面取りなし 四面:布目糸7本/1cm 桶巻作り 凸面:縄目タタキ	N7/0 灰白	最大厚2.1cm	
16	8	一	瓦	平瓦	1	第3層	(9.7)	(14.0)	10	凹凸面無縁を幅広く凸面無縁を幅狭く面取り 四面:布目糸9本/1cm 凸面:斜格子タタキ(距離1cm)	N8/0 灰白	最大厚1.9cm	
17	8	5	瓦	平瓦	1	機械部の中	(12.3)	(9.1)	10	面取りなし 四面:布目糸9本/1cm 凸面:斜格子タタキ(距離0.9cm)	10YR8/2 灰白	最大厚1.9cm	
18	8	一	瓦	平瓦	1	第3層	(13.5)	(13.5)	5.4	20	凹凸面摩滅	10YR7/3 に近い黄	最大厚2.5cm
19	8	一	瓦	平瓦	1	第3層	(9.4)	(7.4)	10以下	面取りなし 四面:布目糸9×12本/1cm 凸面:指紋多数あり	5YR5/4 に近い赤	厚2.5cm 広縁か狭縁か識別不能	
20	9	5	瓦	平瓦	1	機械部の中	(12.0)	(8.6)	10	面取り一凸面狭縁・凸面左側縁 四面:布目糸8×10本/1cm 凸面:摩滅	7.5YR6/4 に近い黄	最大厚2.4cm	
21	9	5	瓦	平瓦	1	機械部の中	(7.5)	(5.3)	10以下	面取り一凹凸面広縁・凹面右側縁 四面:布目糸12本/1cm	N6/0 灰	最大厚1.5cm	
22	9	一	瓦	平瓦	1	第3層	(6.8)	(6.2)	10以下	四面:布目糸12本/1cm 布の織り目混み	N7/0 灰白	最大厚1.5cm、外側溝子、道里上上がり	
23	9	5	瓦	平瓦	1	機械部の中	(10.7)	(12.9)	10	面取り一凹面左側縁 四面:若干平目残る糸9本/1cm 分形線あり	N6/0 灰	最大厚1.8cm	
24	12	6	土師器	高杯 脚部	2	第2層		(5.0)	10以下	内:ヘラズリ 移状工具痕(φ6.5mm)複合部径2.1cm 厚孔3ヵ所(内径径9mm)	2.5YR7/4 淡赤褐	古墳時代中期	
25	12	6	須恵器	杯B	2	機械部の中	(10.3)	(1.7)	10	高台に砂目 内:半平が部分的に摩耗していることから実際に使用されたものと推定 外:回転ヘラズリ後回転ナデか	N7/0 灰白	高台高0.7cm 奈良時代前半か	
26	12	6	須恵器	杯か	2	機械部の中	(11.0)	(2.0)	10以下	外:粘土細の痕跡か 底部に工具痕か爪面残る	N6/0 灰	高台高1.0cm	
27	12	6	瓦	丸瓦	2	機械部の中	(15.9)	(8.9)	(7.1)	10	面取り一凸面狭縁、凹面無縁・凸面無縁 四面:布目6本/1cm 布の織り合わせ面 凸面:摩滅	10YR8/3 浅黄褐	最大厚1.8cm

表4 掲載遺物一覧(2)

遺物番号	写真 掲載番号	種類	器形	調査区名	遺構名	法量(単位cm)			残存率 (%)	調整等(ヨコナデ・ナデは省略) 成形及び調整の特徴等	外色調	備考		
						口径・ 長	底径・ 幅	器高・ 厚						
28	12	6	瓦	平瓦	2	機械 掘削中	(10.1)	(9.6)		10	面取り一凹面(端幅)・凸面広 端 凸面右側縁 凹面:布目糸8本/1cm 布の端じ合わせ 凸面:厚肌、ナデか	10YR8/2 灰白	最大厚1.5cm	
29	12	6	瓦	平瓦	2	機械 掘削中	(8.2)	(13.2)		10	面取り一凹面側縁・凸面側縁 凹面:布目(部分消しナデ消す) 糸8本/1cm 凸面:斜格子タタキ(距離0.70m) 他に比べて格子サイズ小さい	10YR7/2 ぶい・黄 褐色	最大厚2.0cm	
30	18	6	石製品	磨製 石斧	4	第8層	(4.3)	3.5	1.2	50		5G77/1 明緑灰	定角式 板状刃	
31	24	4	瓦器	椀	5	2井戸	(15.1)	6.2	5.9	60	内:ヘラミガキ密(2mm幅) 見込み:ヘラミガキ(2~3mm幅) 外:分割ヘラミガキ密(高台付返まで 及ぶ)	N3/O 暗灰	径高指数39 器壁 6~7mm 輪差型 1~3期か	
32	24	4	瓦器	椀	5	2井戸	第1面	15.3		(5.6)	50	内:ヘラミガキ密(2~3mm幅) 見込み:ヘラミガキ(2~3mm幅) 外:分割ヘラミガキ密(2~3mm幅) 内外面に凹線形の距離多数あり 高台側縁直	N2/O 黒	径高指数36.6以上 器壁 5mm前後 輪差型 II-1期か
33	24	4	瓦器	椀	5	2井戸	第1面	(15.7)		(5.3)	15	内:ヘラミガキ密、短い単位 のヘラミガキを繰り返して無 している(3mm前後) 外:ヘラミガキ密(上縁から2/3程 度)、ヘラミガキの前にヘラズリ (右上がり)のヘラズリ) 内面に凹線形の距離あり(上縁部付 近に集中)	N2/O 黒	器壁 4mm前後 和泉型 1期
34	24	4	土師器	皿	5	2井戸	第1面	9.4 × 9.8		1.6	100	ての字状上縁 内:ナデ(略計回り) 外:ユビオサエ、接合痕あり 切り込み凹板技法により成形	10YR8/3 浅黄橙	井戸の造営に際して置 かれたもの、原始的な 意味合いが強いが 器壁 4mm、乳白色系、 平安型新へし型
35	24	4	瓦	丸瓦	5	2井戸	第1面	(11.7)	(8.8)	6.1	10	面取り一凹面側縁 凹面:布目糸10本/1cm、布の端 じ合わせ、ヘラズリ	N6/O 灰	筋中に黒色粒(1mm 大)多く散見し やや縁の直線質 突出め4、筋出土
36	24	4	瓦	平瓦	5	2井戸	第1面	(14.5)	(11.7)	3.3	10	面取り一広縁凸面、凹面側縁 凹面:タテナデ(若干密行残る) 完全にはナデ消していない 凸面:斜格子タタキ	N5/O 灰	筋中に1mm大の赤色 粒を多く見出し、長石・ 石英質は、磨粒細か い(中砂くらい) やや縁、褐色、 筋込め5、筋出土
37	24	4	木製品	曲物	5	2井戸	第1面	40.5		(14.0)	100		材質:ヒノキ・2段目	
38	24	4	木製品	曲物	5	2井戸	第1面	40.0		(9.0)	100		材質:ヒノキ・1段目	
39	24	4	木製品	折巻の 板敷か	5	2井戸	第1面	34.7	(6.2)	0.6	30	裏面に×印あり 表裏面に虫喰に転用か	材質:ヒノキ 40と接合	
40	24	4	木製品	折巻の 板敷か	5	2井戸	第1面	35.0	(23.1)	0.6	60	裏面に×印あり 表裏面に虫喰に転用か	材質:ヒノキ 39と接合	
41	26	6	縄文 土器	深鉢か	5	南壁 断面 第6層 と第7 層の埋 埋面					10 以下	10YR5/2 灰黄緑	生駒山西側筋土 42と同一埋埋面 で出土していること から縄文後期後葉か	
42	26	6	縄文 土器	深鉢	5	南壁 断面 第6層 と第7 層の埋 埋面	(5.7)	(8.7)		10 以下	内面:委直(横方向) 外面:厚肌	10YR6/3 ぶい・黄 褐色	生駒山西側筋土 41とは若干だが 質異なる 宮城式か(縄文後期 後葉)	
43	26	6	黒色 土器 A類	椀	5	第3層	(19.2)	(7.2)	(5.5)	15	内:暗文の加飾見られず、ヘラミ ガキ	7.5YR7/3 ぶい・黄 N3/O 暗灰	図上覆土(3片あり、 同一個体と推定) 縄文前期 平安時代前期	
44	26	6	須恵器	杯B蓋	5	機械 掘削中	(13.5)		(1.65)	15		N6/O 灰	奈良時代後半~平安時 代初期か	
45	26	6	須恵器	杯B	5	機械 掘削中	(7.6)		(1.5)	15		N6/O 灰	高台高0.4cm 奈良~平安時代か	
46	26	6	瓦	丸瓦	5	機械 掘削中	(6.8)	(4.2)		10 以下	面取りなし 凹面:布目糸10本/1cm 凸面:縦目タタキのチナデ	N5/O 灰	最大厚1.5cm	
47	26	6	瓦	平瓦	5	機械 掘削中	(17.2)	(9.8)		10 以下	面取り一凹面左側縁 凹面:布目糸5本/1cm 凸面:縦目タタキ	5Y6/1 灰	最大厚2.2cm	
48	26	6	瓦	平瓦	5	北壁法 面削落 ナデ	(10.2)	(13.3)		10 以下	面取り一凸面狭端 凹面:布目糸10×7本/1cm	N6/O 灰	最大厚2.5cm	
49	5	6	灰輪 陶器	不明	1	第3層	2.3	3.7		10 以下	内外面輪飾	10Y7/2 灰白(輪) 5Y8/1 灰白		
50	5	6	縄文 土器	不明	5	2井戸	第1面	3.7	6.0	10 以下		10YR5/3 ぶい・黄 褐色	5mmまでの砂多く 含む 生駒山西側筋土	

第5章 総括

今次調査では、大きく4点の注目すべき調査成果があった。

一つ目は、縄文時代後期後葉の所産と判断する土器が出土したことである。これまで、高槻市内では榎尾川以西の地域において、縄文時代各期の遺物が出土しており、なかでも後期・晩期に遺跡数が拡大し、淀川低地の緑辺部から台地・丘陵部にかけて遺跡が集中する傾向が確認されている。また、後・晩期に属する土器には生駒山西麓産のものが一定量含まれていることも特徴として挙げられている(森田1989)。そのような中で、榎尾川以東の地域においても、淀川低地の緑辺部で縄文土器が出土したことは、当地における当該期の集落の存在を示唆するものであり、高槻市の全域に縄文時代の遺跡が拡がる蓋然性が高くなった。また、今回出土した縄文土器も、生駒山西麓胎土のものであり、周辺の遺跡の状況とも合致する。さらに、産出地域に限られる蛇紋岩製の磨製石斧が出土したことも、縄文時代の製品の流通を考える上で興味深い成果である。

二つ目は、梶原寺跡に関連して、梶原瓦窯産と判断する軒平瓦が出土したことである。資料調査の結果、梶原瓦窯の中でも最初期に製作された軒平瓦であることが判明した。また、これまで知られていた軒平瓦の型式とは異なるもので、創建時に使用されたであろう新たな型式の軒平瓦である蓋然性が高まった。梶原寺の造営に関する新たな知見が得られたことは貴重な成果と言える。

三つ目は、平安時代後期に属する井戸を検出したことである。梶原寺に関する主要伽藍や寺域が判然としない現段階では、当井戸が梶原寺に関するものか否かの判断はできないが、その可能性は十分にある。文献上では、14世紀後葉まで梶原寺の伽藍が存在していたことが想定されるため、後述の地形的制約を考慮すれば、当井戸が寺院もしくは寺院に関連する施設で使用されたものであったとすることもできよう。検出した位置は、遺跡の南東部であり、地形的にも西京高槻線より一段下がる低地である。井戸が造営された当時は、湿地かそれに近いところであったことが推定される。仮に寺院とその関連施設があったとすれば、その範囲の南東端に当たる場所と推定できよう。

四つ目は、旧地形に関する知見が得られたことである。平成28年4月に、主要地方道西京高槻線B P道路の予定地内に遺跡範囲外で試掘調査が行われた。今次調査の西側で4箇所、東側で2箇所のトレンチを設けた試掘調査である(図28)。その際得られた層序データを今次調査のデータに加え、柱状図として図化した(図27)。試掘調査では、現代の改良土や盛土、2次的な堆積層が検出されたのみであったが、今次調査で検出した5区第15層の砂層と同一層ではないかという層が各トレンチにおいて認められた。その層の上面は、試掘調査を行った東西方が高く、今次調査部分が低いということが明らかとなった。すなわち、今次調査の成果から、縄文時代後期以前の洪水堆積層と推定される第15層段階では、今次調査区はすべて低地に当たる。それ以降、古代末頃にかけて徐々に3～5区が埋積していった様子が看取できる。1・2区では、土石流による堆積層を検出したのみで、ずっと低地であったのか、3～5区に相当するような堆積層が本来は存在したが、土石流により削られ流出したのか不明である。いずれにせよ、これまでの調査成果を総合すると、一乗寺川と一乗寺川支浜に挟まれた高まり状の平地に梶原寺が創建された蓋然性が高い。現在の田中寺の東に張り出した尾根があるが、その南への延長線上以西は谷地であり、寺院造営には適さない。また、現在のJ R京都線沿いでは、今次調査の3～5区の場所以外は、古代において人が生活するには不適な場所であることが明らかとなった。尚、梶原寺が

創建されたとされる7世紀後半においては、3～5区においても人々が営みを持つには不適であった可能性がある。そして、近世に至り土石流によって、当地の地形がかなり改変した可能性がある。土石流は、一乗寺川と一乗寺川支溪のそれぞれ別々に起きている。流出した土量は、一乗寺川支溪からのものの方が多く、元来の地形も、一乗寺川支溪の谷地形の方が深くて広がった可能性がある。

最後に、今次調査における成果及び既往調査成果を基に、梶原寺跡における人々の営み及び当地の変遷を追って結びとしたい。まず、縄文時代後期後葉に人々の活動の痕跡が認められる。付近に当該期の集落が存在する可能性があり、今後の調査の進展に期待したい。次に、弥生時代の様相は不詳であり、当地における当該期の人々の活動は見出せない。その後、古墳時代前期になると、表1のNo2調査で古墳時代前期の遺構面が検出されていることから、当地に集落が形成された可能性がある。また、梶原瓦窯跡の工房域での調査や今次調査で、古墳時代中期～後期の遺物が出土していることから、古墳時代を通じて、継続して集落が営まれた可能性があろう。梶原古墳群の造営主体がこの付近にいることも予想される。

そして、飛鳥時代になり梶原寺の創建を迎える。梶原寺の伽藍配置に関する実態は、これまでの調査で明らかではなく、今後の調査の進展を待たねばならないが、梶原瓦窯跡の調査や礎石の発見(表1のNo33)によって、少しずつではあるが、状況証拠が積み上げられている。中でも、瓦の分析から、摂津では梶原寺が中心となり重弁系軒瓦が展開することが指摘されており(綱2008)、また、大和の飛鳥寺

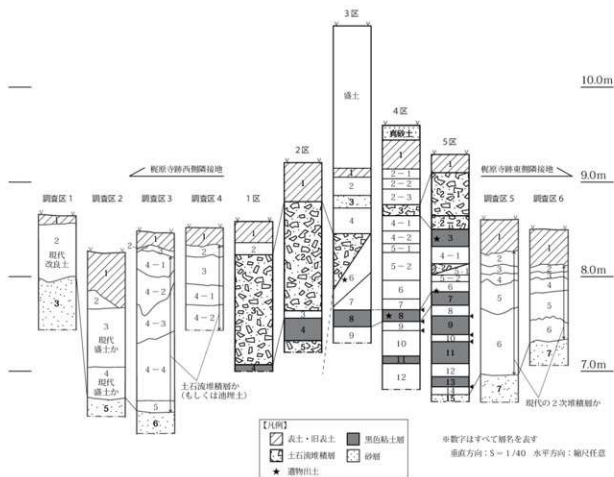


図27 各調査区断面柱状図

東南禪院と同範の軒瓦(飛鳥寺XⅧ型式)が出土し、東南禪院の瓦窯から梶原瓦窯へ瓦範が移動したことが知られる(花谷1999)。北摂地域における拠点的な寺院であり、尚且つ大和との関係をも持ち合わせていたことが窺われることから、梶原寺の重要性が明らかであろう。

梶原寺創建以後は、文献によってのみ、その存否が知られるが、今次調査で初めて平安時代後期の井戸が見つかった。この井戸が寺院に伴うものか否かの判定はできないが、少なくとも当該期に当地において人々が生活を営んでいたことが明らかとなったことは重要である。その後、中世段階において、掘立柱建物や礎石建物が検出されており、寺院に関連するものかどうかは判然としないが、当地における人々の生活の痕跡が認められる。

そして、近世には梶原寺の推定地を囲むように、土石流が発生し、それまでの地形が一変したことが推定できる。

以上が今次調査で得られた成果である。今後の調査の進展によって梶原寺に関する全容が明らかとなることを期待したい。

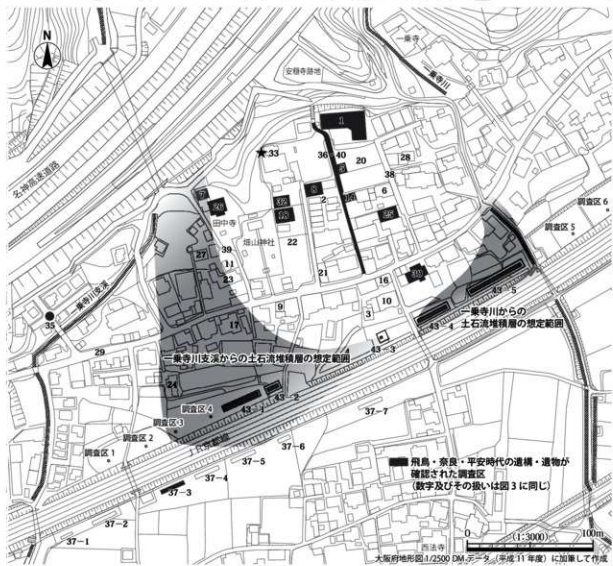


図 28 既往調査と土石流

参考文献

〔縄文土器・石器〕

泉 拓良 1981 「3. 後期の土器 近畿地方の土器」『縄文文化の研究』第4巻 縄文土器Ⅱ 雄山閣出版

大下 明 2004 「関西における縄紋時代後・晩期石器群の概要」『縄文時代の石器Ⅲ—関西の縄文後期・晩期—』第6回関西縄文文化研究会

土谷崇夫 2004 「関西地方の後晩期における磨製石斧の地域性—形態・石材・大きさを主に—」『縄文時代の石器Ⅲ—関西の縄文後期・晩期—』第6回関西縄文文化研究会

森田克行 1989 「三島地方の縄文土器」『高槻市文化財年報 昭和61・62年度』高槻市教育委員会

家根祥多 1981 「4. 晩期の土器 近畿地方の土器」『縄文文化の研究』第4巻 縄文土器Ⅱ 雄山閣出版

〔土師器・須恵器〕

古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成』

古代の土器研究会編 1993 『古代の土器 2 都城の土器集成Ⅱ』

古代の土器研究会編 1994 『古代の土器 3 都城の土器集成Ⅲ』

田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店

辻 美紀 1999 「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室 10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室

〔黒色土器・瓦器〕

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

〔瓦〕

網 伸也 2008 「摂津と河内をつなぐもの—軒瓦にみられる在地間寺院交流—」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2006年度 共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター

花谷 浩 1999 「飛鳥寺東南寺院とその創建瓦」『瓦衣千年—森都夫先生還暦記念論文集—』森都夫先生還暦記念論文集刊行会

名神高速道路内遺跡調査会 1997 『梶原瓦京跡 発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第3報

〔その他〕

高槻市史編さん委員会編 1977 『高槻市史』第1巻 本編Ⅰ

名神高速道路内遺跡調査会 1998 『梶原古墳群 発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第4報

写真図版



1. 1・2区 調査前状況（東から）



2. 4・5区 調査前状況（西から）



1. 1区 南壁断面 (北東から)



2. 1区 全景 (東から)



3. 2区 南壁断面 (北西から)



4. 3区 西壁断面 (東から)



5. 4区 南壁断面 (北西から)



6. 4区 第2面 全景 (西から)



7. 4区 第3面 全景 (西から)



8. 4区 第3面 6溝断面 (西から)

写真図版 2



1. 5区 南壁断面 (北東から)



2. 5区 南壁断面 (北西から)



3. 5区 南壁断面 (北西から)



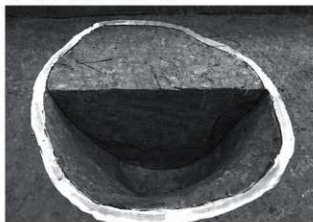
4. 5区 第1面 全景 (西から)



5. 5区 第3面 全景 (西から)



6. 5区 第4面 全景 (西から)



7. 5区 第3面 4土坑断面 (北から)



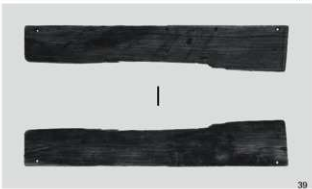
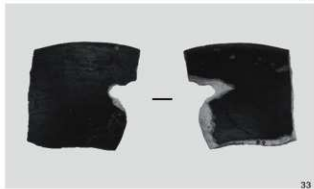
8. 5区 南壁断面 縄文土器出土状況 (北から)

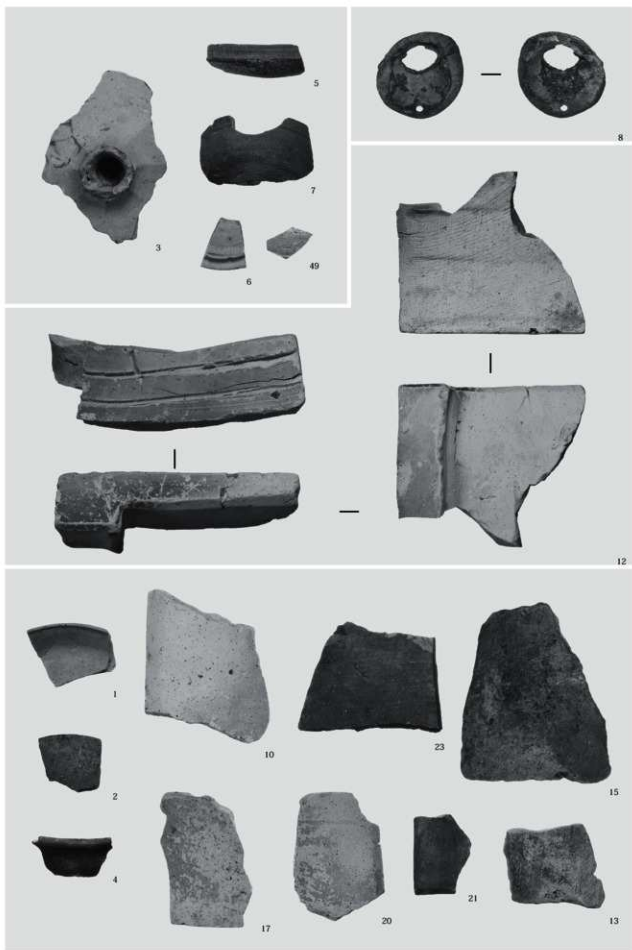


1. 5区 第1面 2井戸 断ち割り状況 (南から)

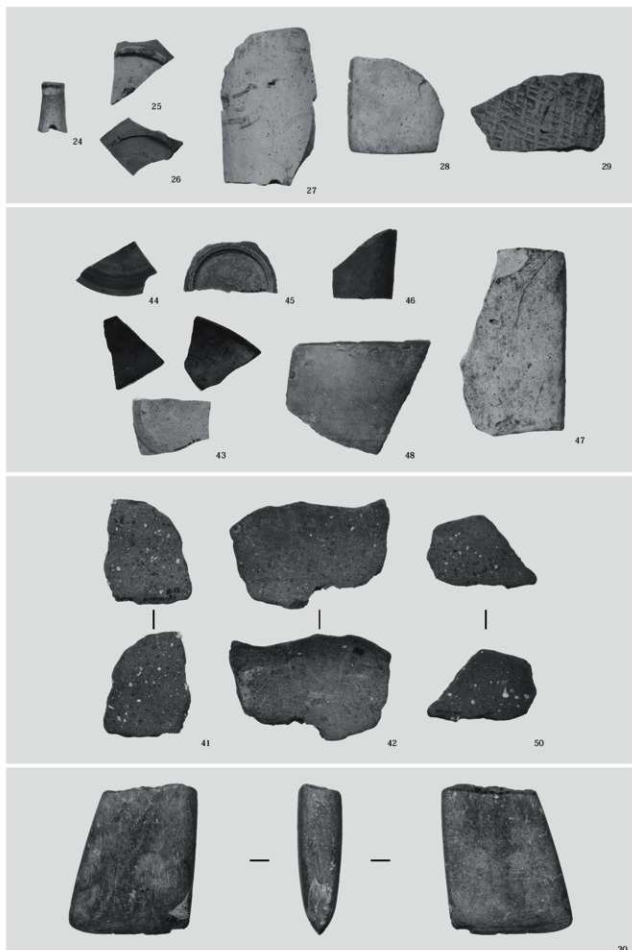


2. 5区 第1面 2井戸 掘方内土師器皿出土状況 (南東から)





写真図版 6



報告書抄録

ふりがな	かじわらであと						
書名	梶原寺跡						
副書名	主要地方道西京高槻線B P道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第287集						
編著者名	鹿野 望						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072-299-8791						
発行年月日	2017年9月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
かじわらであと 梶原寺跡	おおさかふたかつし 大阪府高槻市 かじわら 梶原1丁目	27207	104	北緯 34° 51' 53" 東経 135° 39' 1"	平成29年1月5日 ～ 平成29年2月22日	215㎡	主要地方道 西京高槻線 B P道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
梶原寺跡	寺院	縄文時代	溝		縄文土器・磨製石斧		
		古墳時代			土師器・須恵器		
		飛鳥・奈良 時代			土師器・須恵器・瓦	梶原瓦窯産軒平瓦の出土	
		平安時代	井戸			土師器・須恵器・黒色土器・ 瓦器・灰軸陶器・瓦	井戸造営時の祭祀痕跡あり
要 約	<p>縄文時代後期後葉に属する土器が出土した。檜尾川以東の地域においても、当該期の集落の存在が示唆される成果があった。さらに、産出地域が限られる蛇紋岩製の磨製石斧が出土したことも、縄文時代の製品の流通を考える上で興味深い。</p> <p>梶原寺跡に関連して、梶原瓦窯産の軒平瓦が出土した。梶原瓦窯の中でも最初期に製作された軒平瓦であることが判明し、これまで知られていた軒平瓦の型式とは異なるものと判断でき、創建時に使用されたであろう新たな型式の軒平瓦である蓋然性が高まった。</p> <p>遺跡の南東端において、平安時代後期に属する井戸を検出した。梶原寺に関する主要伽藍や寺域、存続時期が判然としないうる現段階では、当井戸が梶原寺に関するものか否かの判断はできないが、当遺跡における数少ない遺構を検出した。</p> <p>旧地形に関し、縄文時代後期以前の洪水堆積層と推定される第15層段階では、今次調査区はすべて低地に当たる。それ以降、古代末頃にかけて徐々に3～5区が埋積していった様子が看取できる。一乗寺川と一乗寺川支溪に挟まれた高まり状の平地に梶原寺が創建された蓋然性が高い。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第287集

梶原寺跡

主要地方道西京高槻線B.P道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2017年9月29日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地